

白十四は要點である、黒より先鞭をつけて此の邊を防備するとしてもヤハリ此の點より外はない。
「註」此の十四の點は見合ふ點と言つて黒が左から迫れば右へ拓く若又右から迫れば左へ拓く、何れにしても二間拓の出来る好點である。

黒十五は●より掛つてもよい、又單に●と下側中邊を占領して居てもよい。

「註」此の●の點もヤハリ見合の點で、白が(ハ)と來れば●へ拓く、若又(ニ)から來れば悠然として●と拓く事の出来る點である。

黒十五は左方から●と掛つたと假定し、其の時白は○と單關する手と二十の點から挾んで打つ手とある、白が○と飛べば黒は二十の點へ拓いてあげばよい、白が○へ飛ばずして二十の點から挾んで來たならば、黒は(十八の點)三々へ打込むか或は十五の點に兩掛を打つがよい。

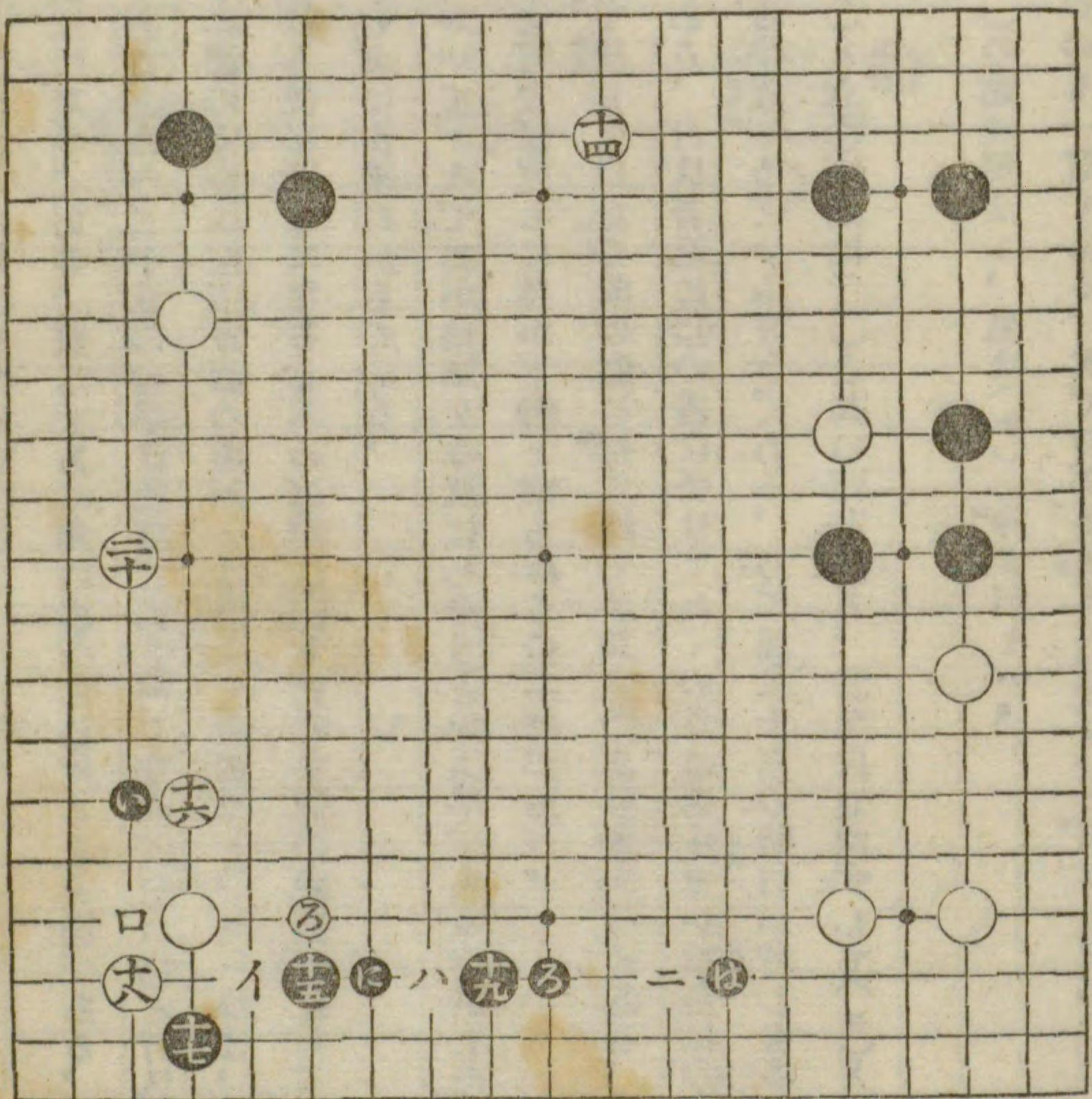
是と同じく本圖黒の十五と掛つた時に當つても白は必ずしも圖の如く十六と飛ぶものとは限らぬ、或は●と下側星下から夾んで打つのも亦一策たるを失はぬのである。

黒十七は非常に大切なる手である、若し此の所を手抜して捨あくと、白に(イ)と尖頂けられ黒○の點に立つた時白に●の點から攻立てられて非常な不利益を醸さねばならぬ、又圖の如く十九と拓く上から見ても此の十七の手を打たずして單に十九の二間拓をすると忽ち白に(イ)と尖頂られて同じく不利を招かねばならぬ、即ち此の十七の一着は白からの尖頂を拒ぎ、右方へ拓く準備として先づ

白の根據に迫り彼を削つて自ら益する手である。

白十八是亦重要な手で、此の手を打たずして單に二十の點に拓くと黒から此の點へ尖まれて少からぬ損害を招かねばならぬ。

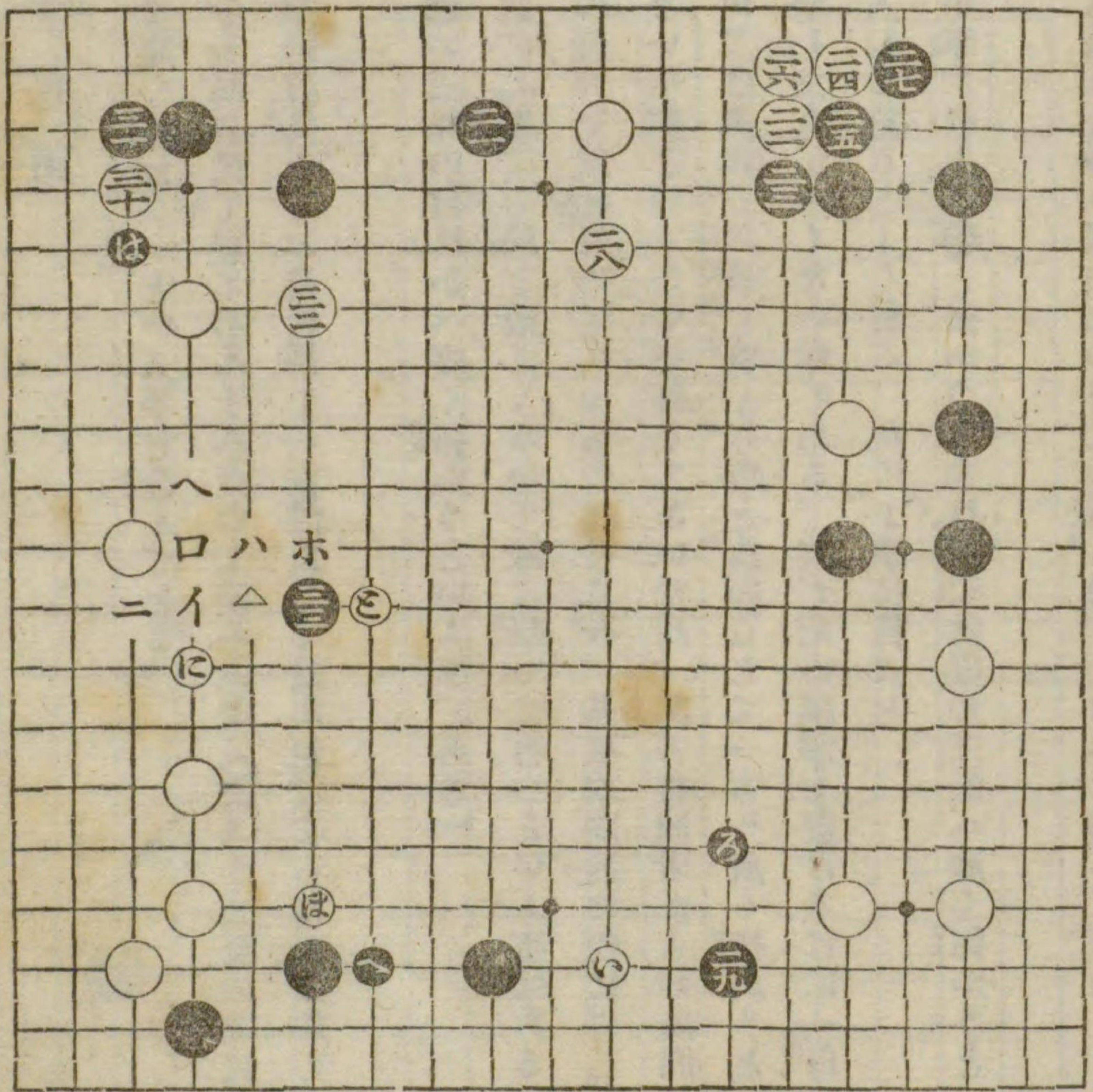
「註」白が十八の手を閉却すると兩重の不利を蒙らねばならぬ、即ち白十八の手で二十と打ち黒が十八の點に尖み、白(ロ)と應じたと假定すると、白は自分の地を削られた上に後手を引き、黒をして先手を以つて此の黒の活を完全ならしむるの不利がある。



(局先互法石布)

黒二十一は先づ廣く地の造り得られる方面から白に迫つたのである。
 白二十二以下二十八迄の相互の應接は約束手である、黒二十九は此の場合に於ける最大場である。
 「註」 下側左方の黒が若し薄弱である此の二十九の着手は危険である何となれば白に㊦と打込まれる惧があるからである、然し本圖の場合は左下方面の黒が一寸治つて居るのと、モ一つは、若し白が㊧と打込み黒に㊨と飛ばれる様な結果になると其の影響は直ちに右下隅の我白地に及ぶ事になるから白は容易に㊩と打込む事は出来ぬからである。
 白三十の一着は先づ敵の地を削つておいて、次で我が地域を厚壯にしやうといふ手である、若し此の三十の一手を打たずに單に三十二と打たば直ちに黒から㊪と來られるの不利がある。
 黒三十一も亦手拔する事は出来ぬ、手抜して白から此の點に押されては其の損害計數の外である。
 黒三十三は軽く敵地を侵略する手である、白は普通に㊫の邊に受けておくの外はあるまい、白に㊬と低く應じさすれば黒三十三の目的も半達せりといふ可きである、乃て黒三十三の時白が若しも手抜したらば黒は(イ)と打ち、白が(ロ)と立たば黒は(ハ)と其の頭を縛る、若又白立たずして(ニ)と這はゞ黒は(ロ)と押すがよし。
 若又黒三十三の時白手拔せずして(ハ)の點に飛ばし、黒は(ホ)と押すがよし。
 或は黒三十三の手を以つて(ホ)と打つのも一策である、次で白が手拔すれば(ロ)と頂けて白が(イ)から縛れば(ヘ)と行ひ、(ヘ)から縛れば(イ)と行ふがよし。又白手拔せず△印へ來れば三十三の點へ押しておく、若又(ハ)と頂けて來れば△印へ縛ねておくがよし。

から縛れば(ヘ)と行ひ、(ヘ)から縛れば(イ)と行ふがよし。又白手拔せず△印へ來れば三十三の點へ押しておく、若又(ハ)と頂けて來れば△印へ縛ねておくがよし。
 □問、黒三十三を一路低く△印に打つたならば如何です。
 ○答、深く敵地に入るは危険である、若し黒が三十三の手を△印邊へ深く來ると白は先づ一着㊭の邊に頂け黒を㊮と行ばして置いて㊯の邊から冠に壓して攻めるといふ手が出来るかも知れぬ。



（局先互法石布）

互先第二十五局

(本圖)白二は後に右側㊸方面に向つて廣く拓かう、といふ手を含んでをる。

「註」此の黒一白二の形は已に第十一局に出て居て第八十八頁の上欄の説明及第八十九頁の圖によつて明瞭な筈である、が其と同型の打出たる本局に於て一言注意して置かねばならぬのは外でもない、第十一局説明の第一行に

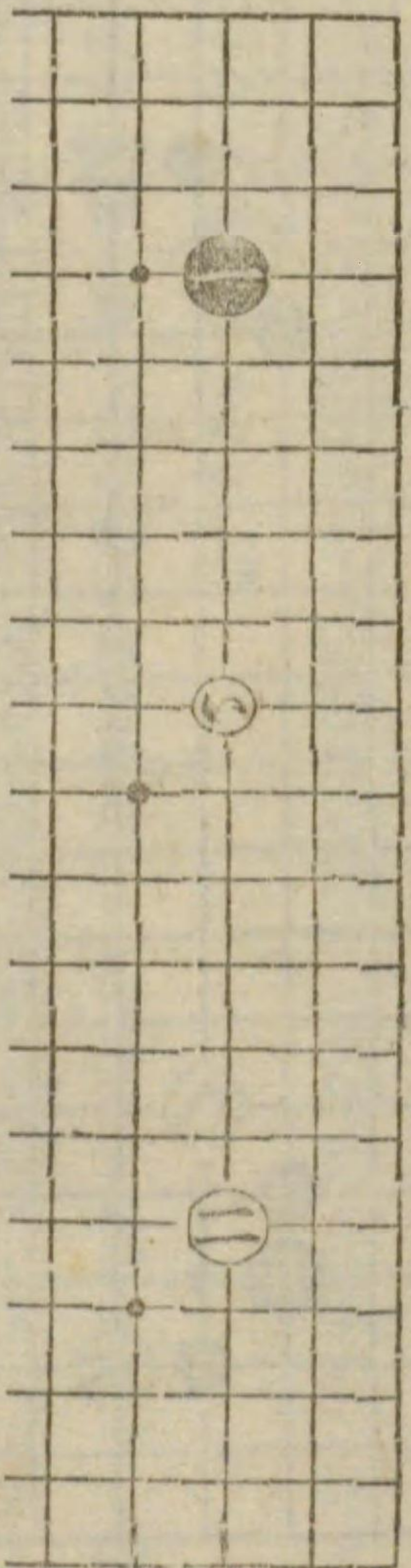
『白二は黒に㊸と掛からして㊸㊸の三點の何れかへ廣く拓かうといふ手である』

と説明してある、此の説明を讀む前に『黒は明隅を捨て、ちいて敵に掛つて打つといふ事はある可からざる事である』といふ既定の條件を頭に置いてかゝらねばならぬ。是は本講義に既に再三再四説いた所であるから言ふ迄もない明確な事として省略しておいた所、其の後讀者からの來問に徴すると、彼の説明を以つて『白二は黒に三の手で直ぐに㊸と掛からして一方へ廣く拓かうといふ手である』と説いたものと誤解した人が少くない様である、其で此の誤解を避けるには『白二は』の次に他日といふ二字を挿入して見るとよく解る、更に丁寧と言ふと

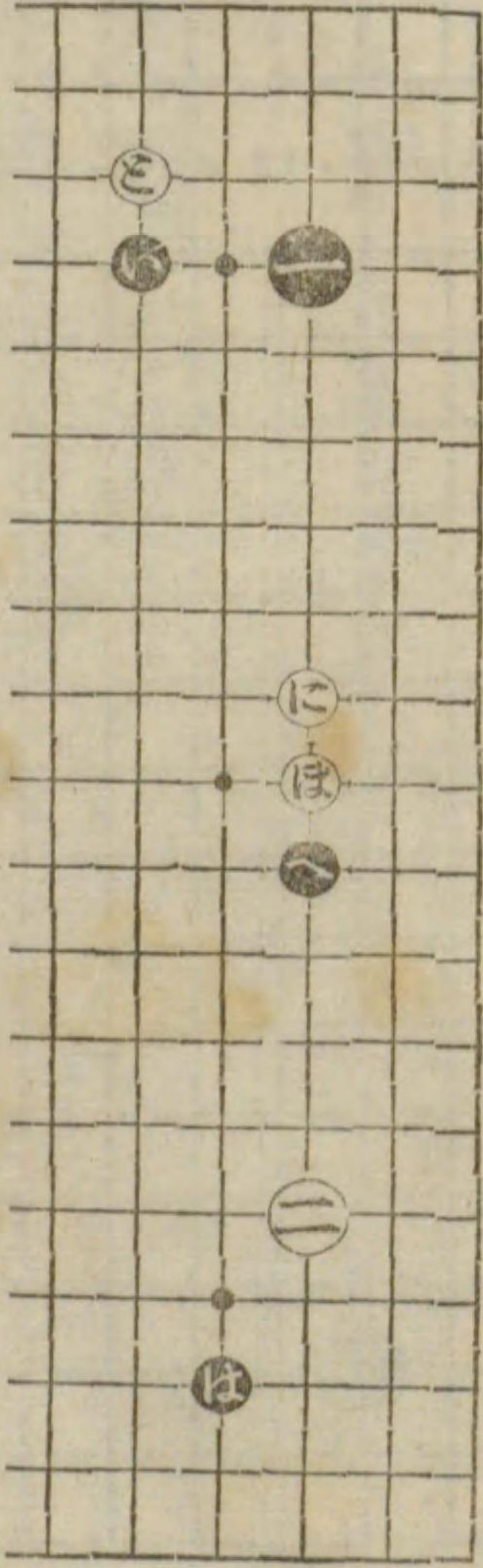
『白二は他日右上方隅に㊸の高締の出來た後黒が㊸と掛かつて來れば㊸㊸の三點へ廣く拓かうといふ意を含んでをる』

といふ事になる、乃ち他の明隅をも捨て、あき又左上の自己の締もせず白二に對して掛かりを

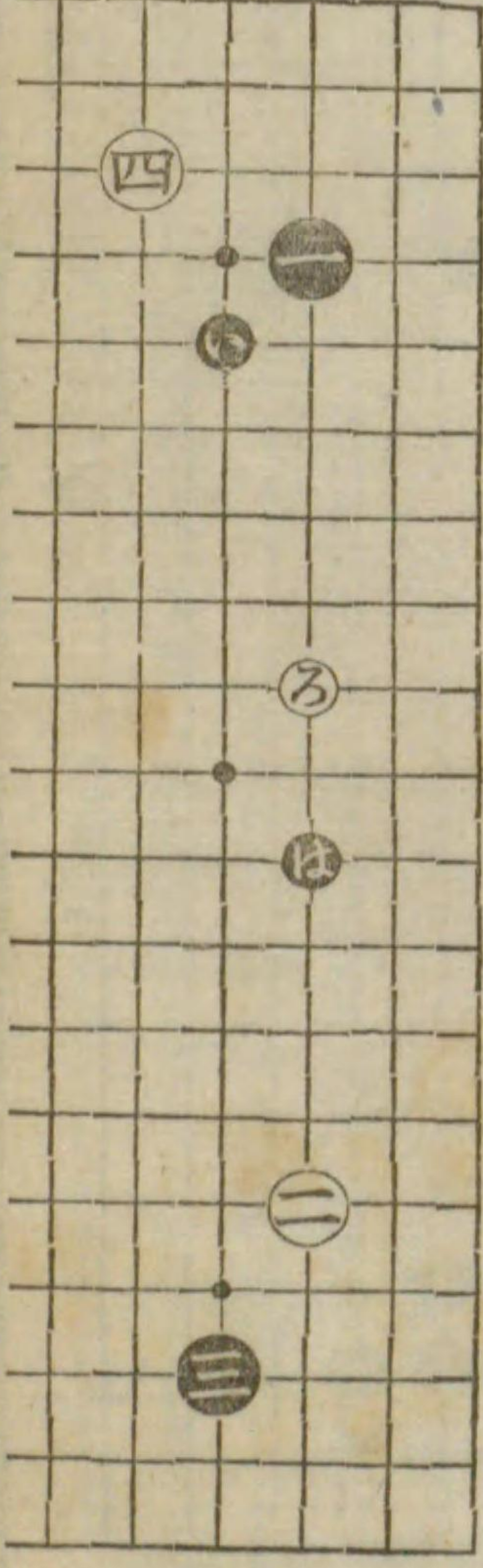
(本圖)



(參考圖ノ一「互先第十一局の初」)

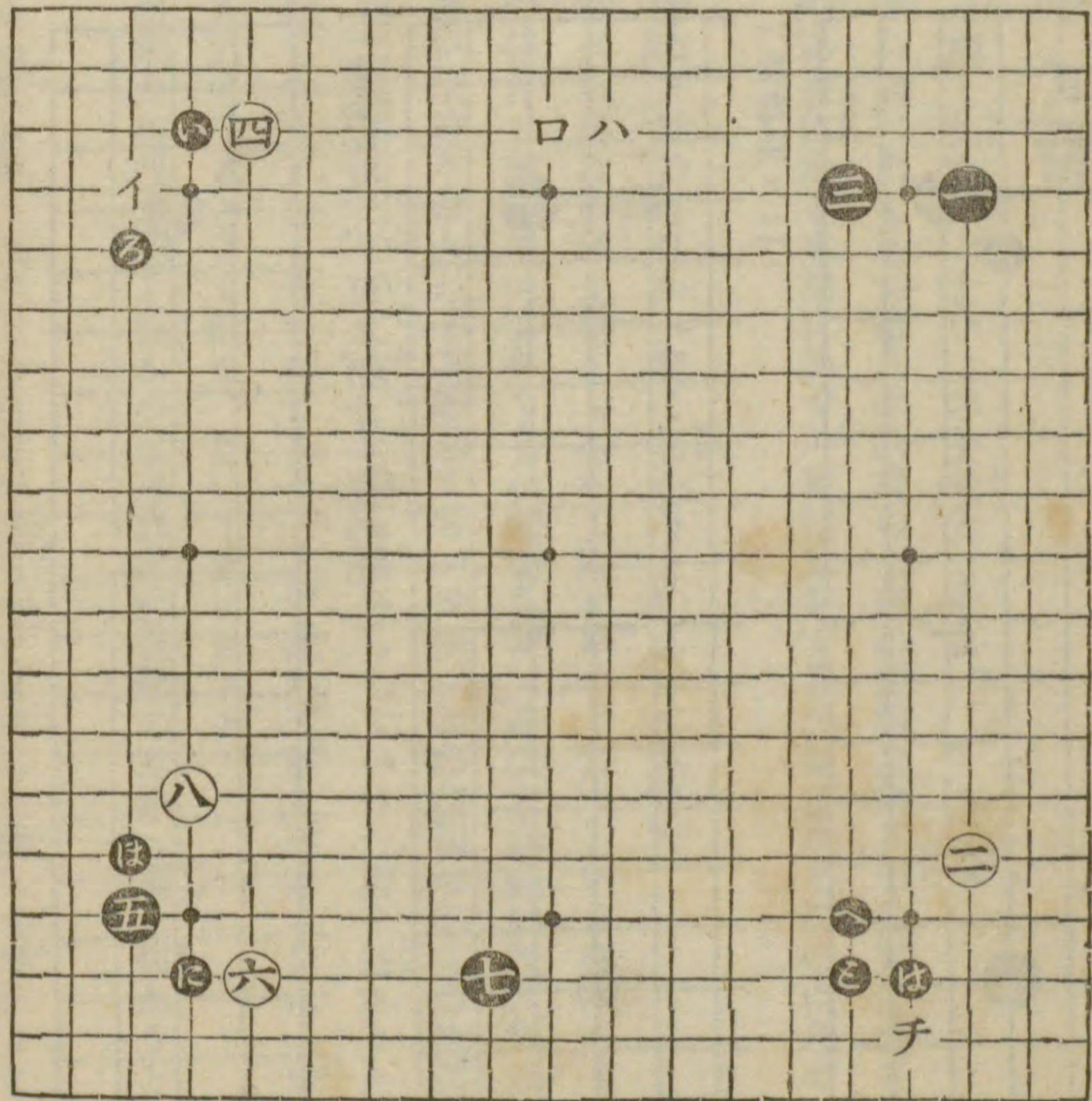


(參考圖ノ二)



打つといふ事は不道理な着手である、其の故は茲に「參考圖ノ二」を以て示す通り黒一白二の次黒が三の手で直ちに白二に掛つたならば、白は黒一に對して四と掛かる其の時黒が右上を㊸と尖めば白に㊸と廣く拓かれる、若又白二を㊸と夾めば忽ち白に㊸の點へ掛けられて低地を這はされる何れにしても愚を見る譯で、之によつて見るも黒が直に三と掛かる手のない事も明了、随つて白二の意が直に黒に掛からしてといふのでない事も自ら明になるであらう。

黒三は●と小目若くは○と目外に打つてもよい、但しさう打てば右下隅へ●と掛かる手とは何等の連鎖を持たぬ事になる。白四を此く目外に打つたのは、若し黒が(イ)と低く掛からば(ロ)(ハ)の二點の何れかへ廣く拓かうといふ考である。黒五は普通の手である、が然し此の一點とのみは限らぬ、或は●或は六の點或は●の何れでもよす。



黒七は後に右下へ●と高掛を打たうといふ意を含んで此く三間に夾んだのである。

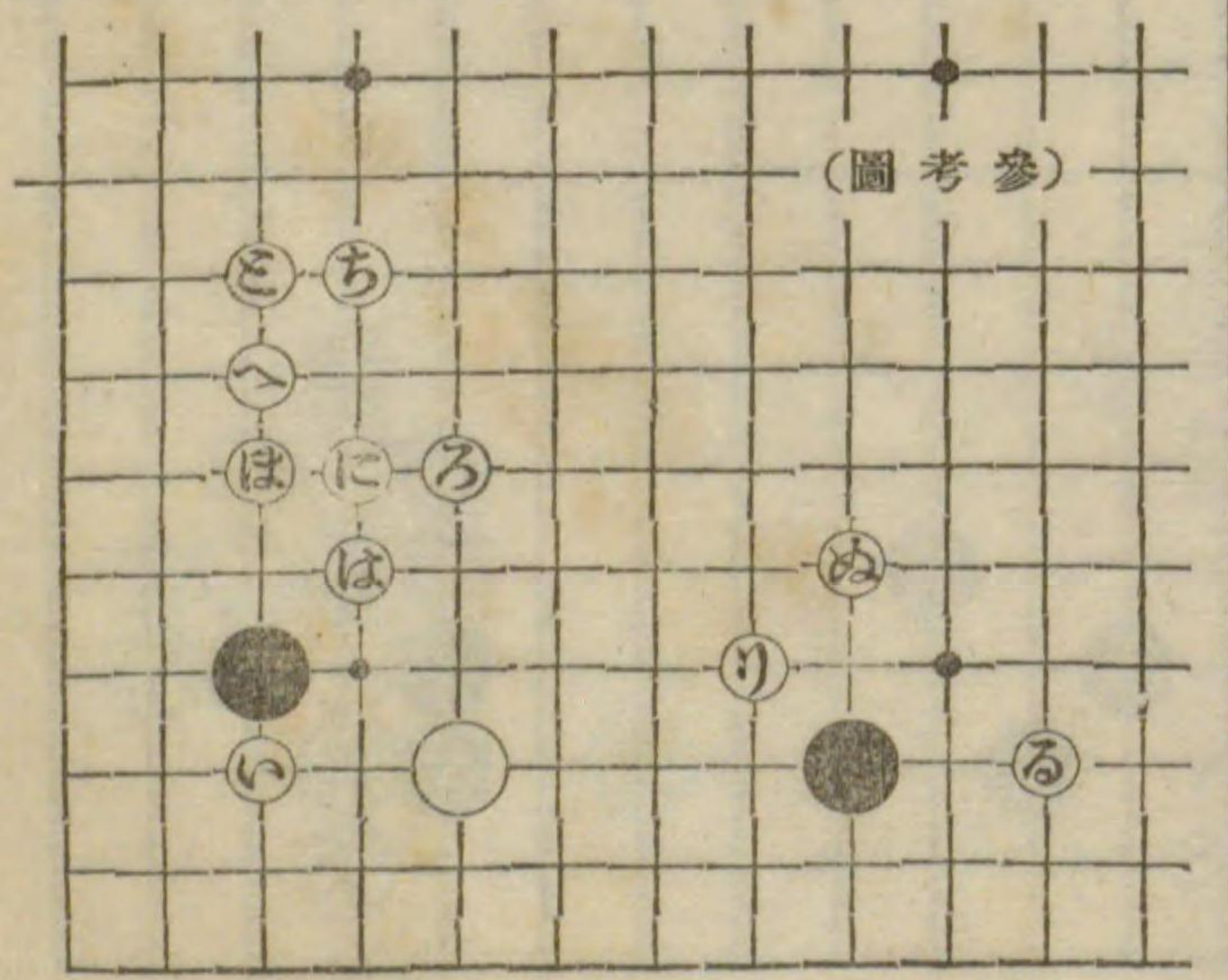
「註」 尙手順は違ふが「互先第二十三局」説明第百六十二頁第四行目の「或は黒五の手で」以下三行及註の四行と同轍の策戦であるから参照せらる可し。

尙黒七は次で白が(イ)と左上を締らば直に●と打ち白が●の點黒●白(チ)の應接を遂げておいて●と尖頂けやう、若又白が左上を締らず右下隅を●の點に締らば黒は直ちに●と尖頂けて急に迫まらうといふ二通りの策を考へて居るのである。

白八の大斜走掛は、此の黒より●と尖頂けられる手を凌いだのである。

白は黒から尖頂けられる手を凌ぐに此の大斜走より外の手はイケヌかと言ふと、決してさうではない、他の何れの着手を擇ばうとも其は白の任意である。

「註」 三間夾に於ける此の形の時白の凌手は十一通りある、其は○の三々頂○の二間飛○の斜走掛○の大斜走掛○の一問夾返し○の二間夾返し○の三間夾返し○の三間高夾○の肩○の冠○の夾○ 是てある詳細は定石の部を参照せらる可し。

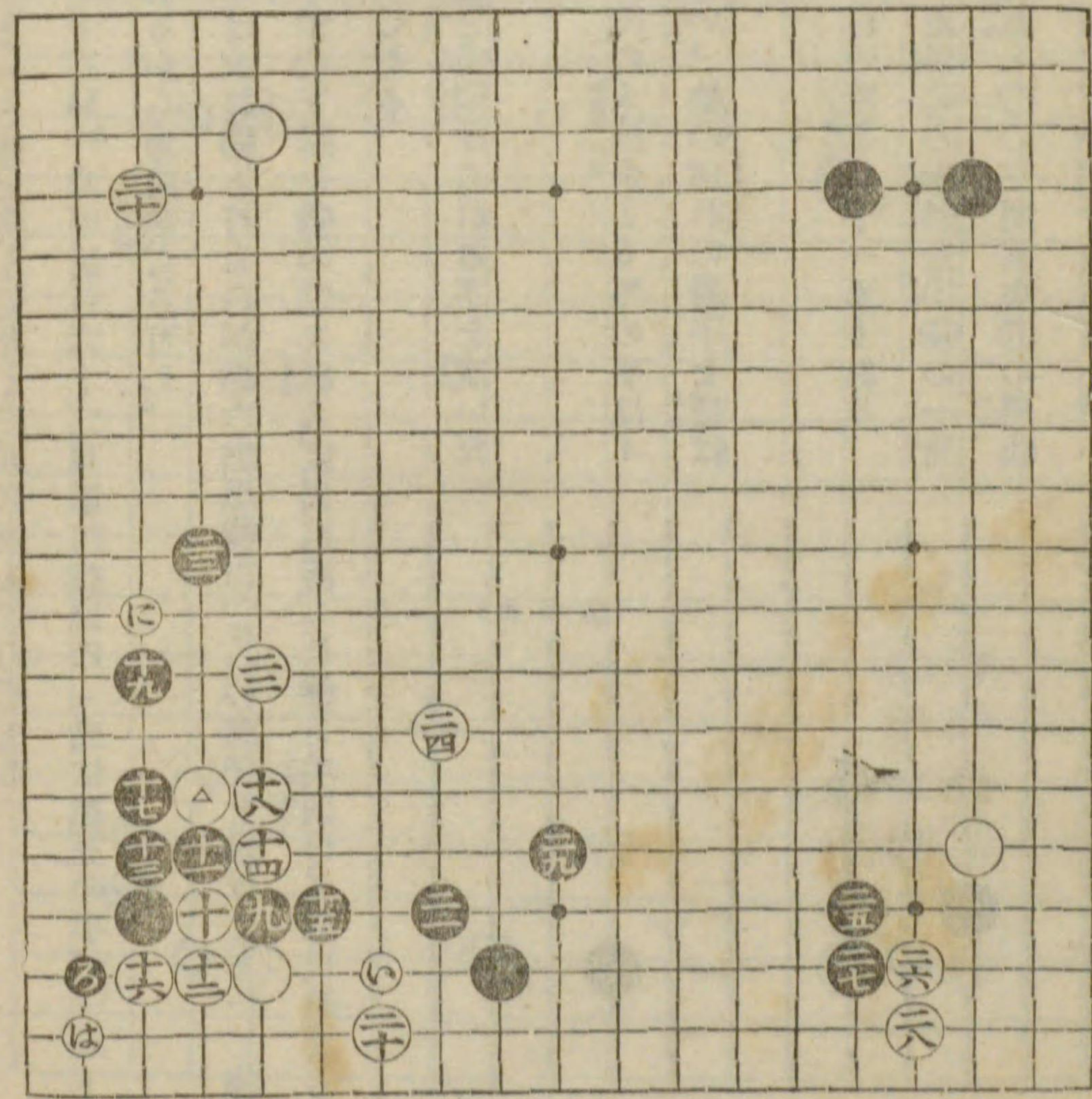


（局先互法石布）

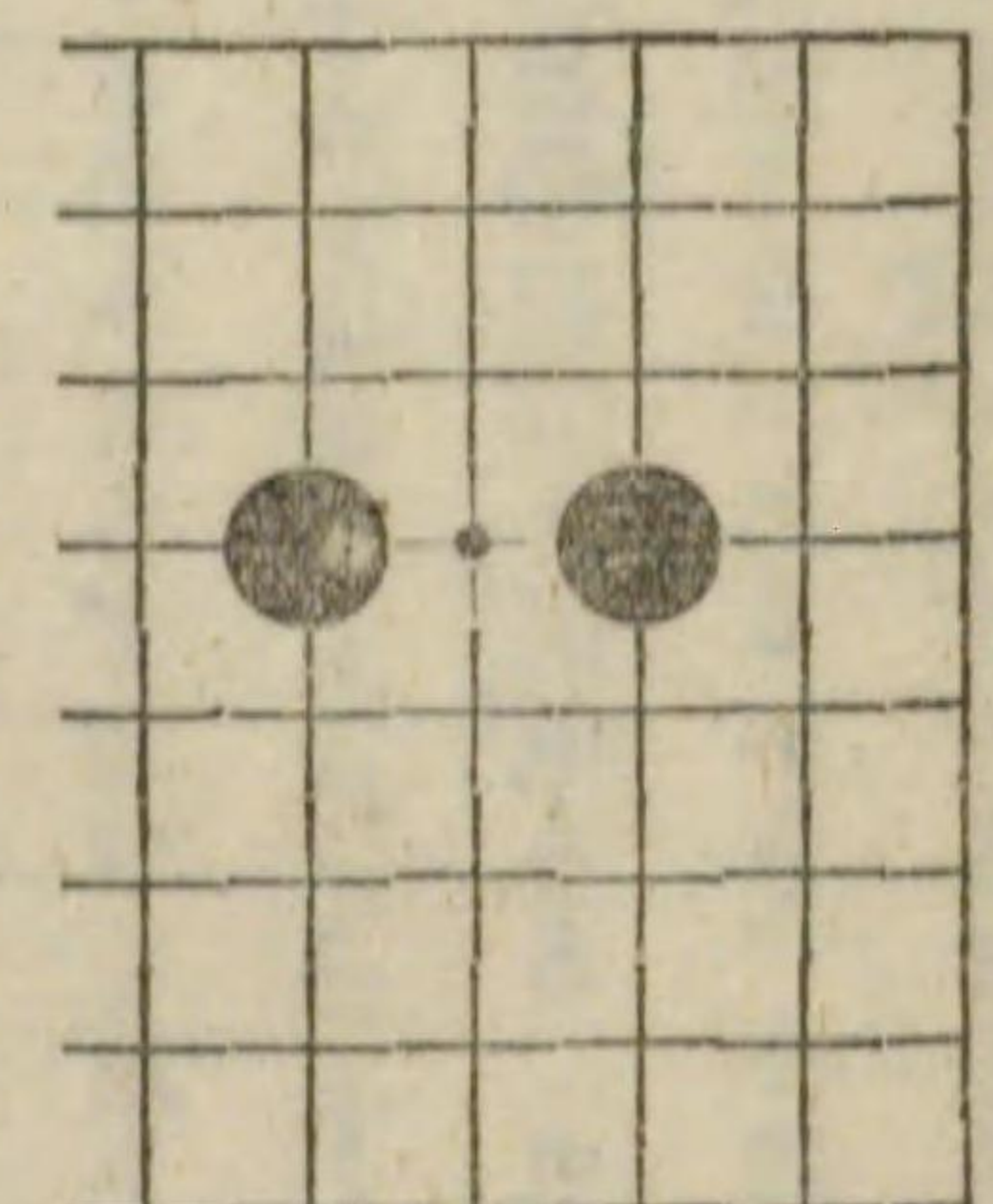
黒は九の手を十一の點若くは十七の點に頂ける手もあるが先づ本圖の通り打つが普通である。白十以下二十四迄は尋常の應接である。

□問、黒十三の手で十四の點を粘いておかば其の結果如何なりませうか。

○答、本圖の様な場合は十三の手で十四の點に粘ぐのは大不利益である、其の故は次頁「參考圖」の様な結果となつて、當初に夾んだ七の一子が、全く無勢力の状態になるからである。



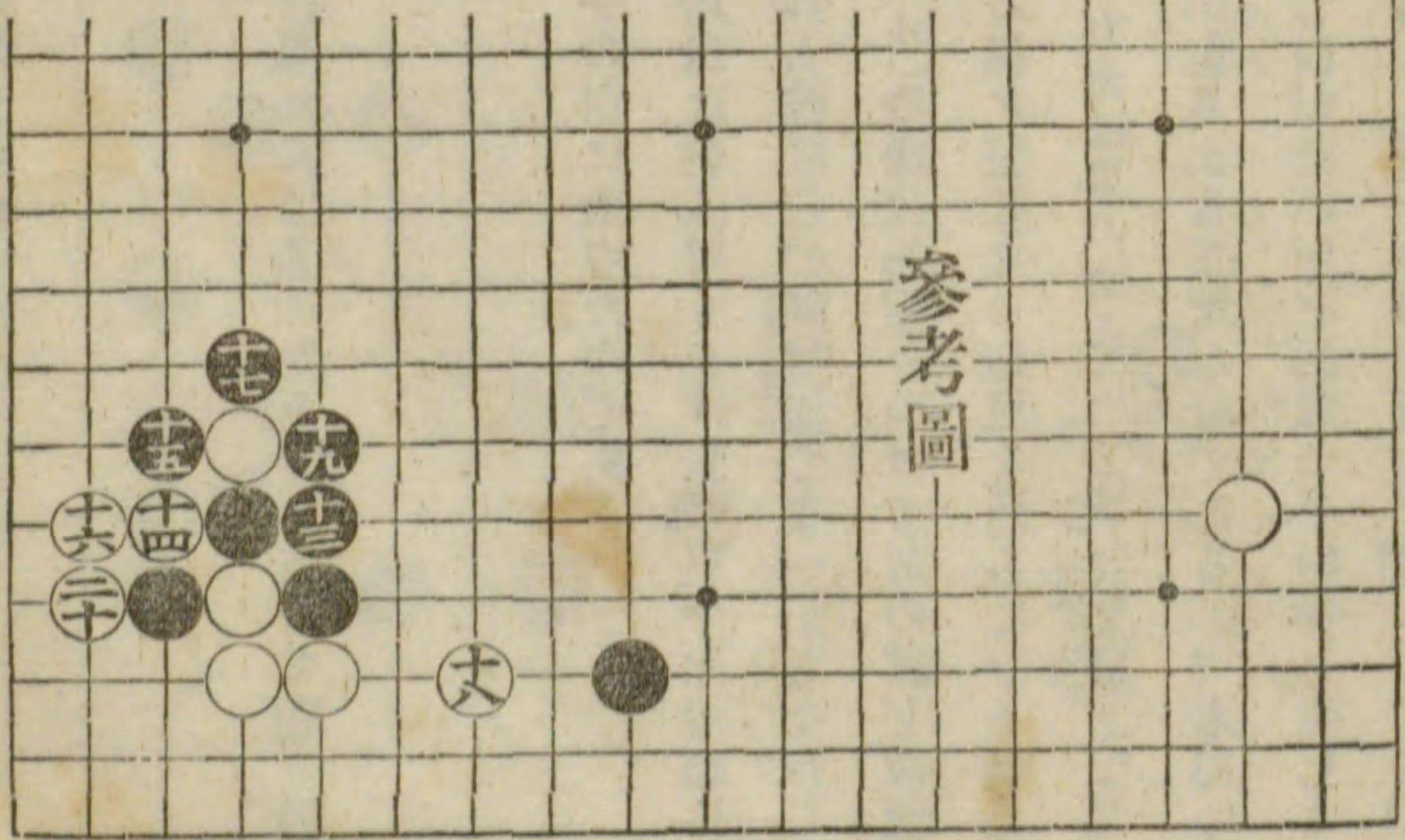
「註」 黒が十三の手で十四の點に粘ぐのは右上方面に白の布石が無くて白△印の一子を征に提起得らるゝ場合であると共に、七と三間夾のない時である、といふ事を記憶しておかねばならぬ。



尙本圖白二十の手で○と打つ事がある、其は専ら征の關係によるので、白に二十の手を○と打たれる惧のある時は、黒は初に溯つて十九と飛ぶ以前に先づ一着と緯ね白に○と抑へさせて之が豫防を講じて置かねばならぬ、其の詳細は大斜指定石の詳解に譲つておく。

黒二十三を手抜すれば白に○と頂けられる、白又二十四の手を閑却すると黒に此の點から煽られて不利を招く。黒二十五の高掛は既に七と着手する當時から含んで居た手である(手が緩めば何時でも行かうと覗つて居る)

參考圖



(局先互法石布)

黒二十九は白に㊦の邊へ迫られる防備を兼ねて暗に左方五子の白に感じを與へて居る。
白三十の締は此の場合に於ける最も大場である。

黒三十一は一路控へて㊧と打つておくのも佳い。

白三十二是亦大利を保有する良着である、此の一着が無ければ黒からは急に左上隅に迫つて㊨と頂ける様な策もある。

黒三十三は先手を以つて㊩の頂越しを拒いだのである。

黒三十五は白から㊪と出路を閉塞されるのを拒ぐと同時に五子の白に迫つたのである。

白三十六の一着は實に苦心慘憺の手である、何となれば此の所白は能ふ可くんば先づ三十七の點に尖んでゐて然る後に三十六へ拓きたいのである、が遺憾ながら茲は白の獨擅場でないから今若し白が三十七への尖を先きにするれば、黒は直ちに三十六若くは(イ)の邊に先鞭をつけて白の謀を破壊する手段に出て、白の計劃は阻齟するのみならず却つて左上の黒に宏壯なる地域を造らしむる結果となる、乃て止むなく白は、先づ三十六と地歩を占めて三十七方面は黒の來るに一任したのである。

黒三十七は普通の場合ならば白に㊫黒㊬白㊭と出截らるゝ患があるから無理な着であるが、本局の形勢では左方に未だ整はぬ五子の孤弱な白があるから、今若し白が此の所を出截つて紛争を生じると、忽ち其の影響が左方五子の白に及ぶ惧があるから白も隠忍して三十八以下低地を這ふより外は

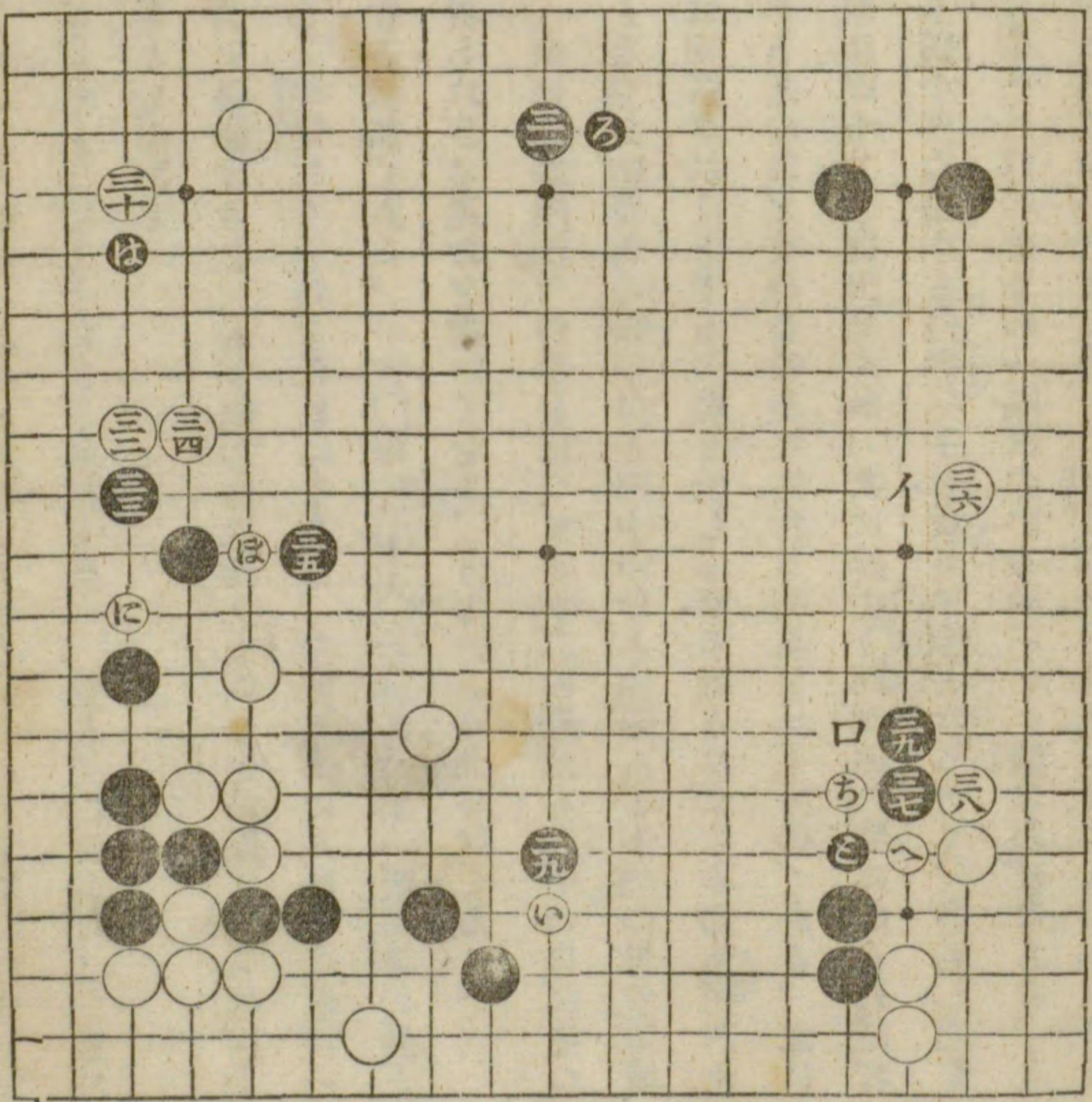
ないのである。

随つて黒三十七も亦臨機の好着點を擇んだ譯になる。

□問、黒三十七の手を(ロ)と二間飛したならば如何ですか。

□答、其は緩慢の嫌がある、矢張り酷しく三十七と迫るに越した事はない。

「註」 普通の場合で三十六方面に白がある時は黒は三十七の手を(ロ)に二間し、廣く拓いて居る白の地を低くからしめると云ふ趣向もあるが、本圖の場合は白より㊮、㊯、と出截らるゝ恐のない處であるから烈しく此所へ迫るがよいのである。



（局先互法石布）

白四十の曲りは意味深長の着手である、何となれば、此の一着によりて自ら此の右下隅の白地を安固にし同時に下側の黒地を侵略して遙に左方△印五子の白に聲援を與へ、兼ねて□印(三十六)孤立の白の窮境に陥るを救ふの良着であるからである。

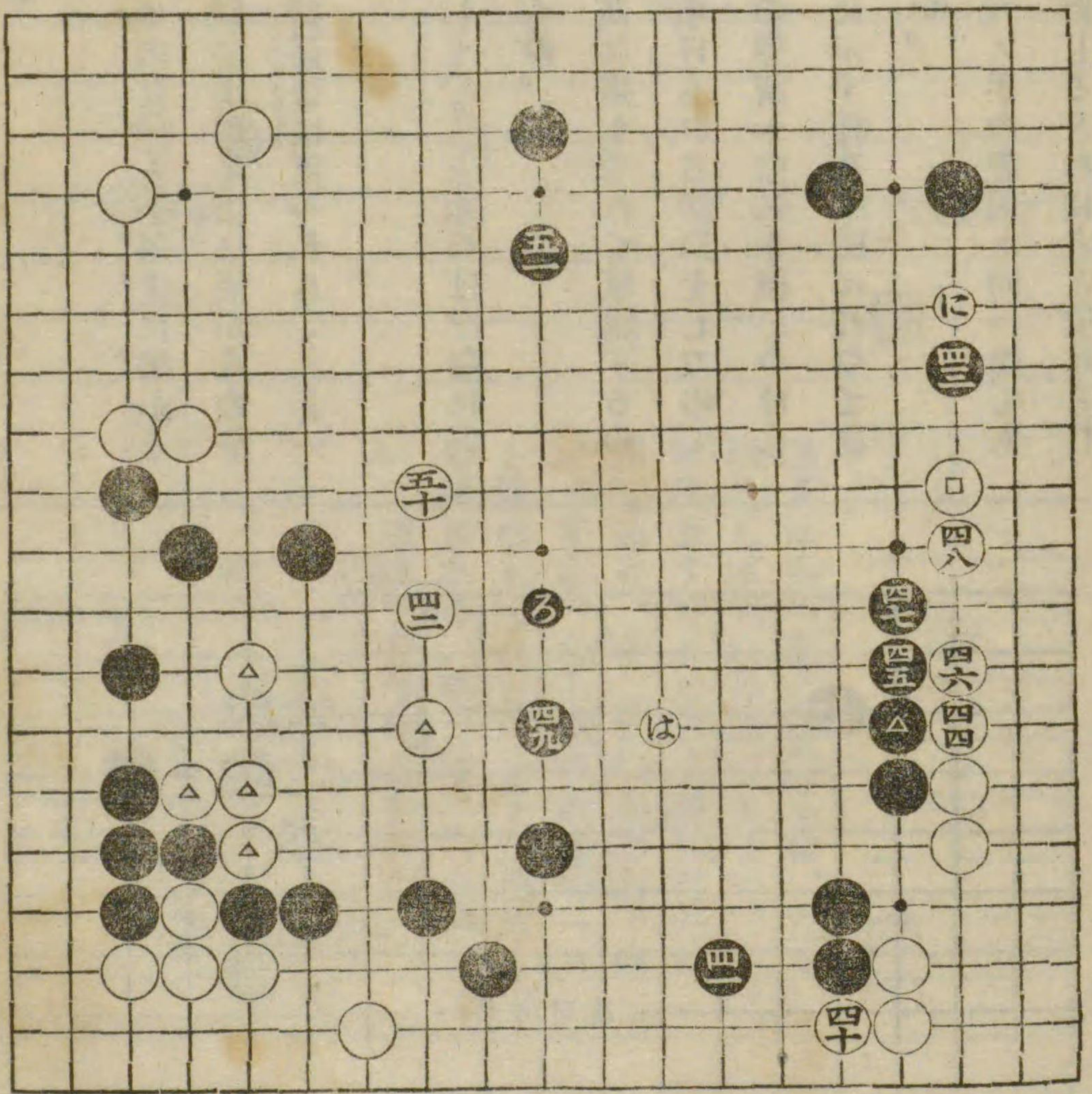
「註」 白が四十と曲る手の前の局面を通観すると、右下隅の白は黒より四十四の點に曲られ四十の點に押へらるゝ事に由つて太だしく萎縮して不利を見ねばならず、左方五子の△印白は未だ一眼の備もなくして黒の勢力圏内に在る状態である、一方□印(三十六)の白は右上一間高縮の黒と右下△印(三十九)の黒の鋒の下に計られざる運命を抱いてをる、ともいふ可き現状である。

今白四十の一子の効果を詳述せんに、次に黒が四十一の手を以つて四十二の點から五子の白に迫つたと假定し、其時白四十九黒④白⑤となつた結果此の④の白と四十の白と相望んで下側の黒の領域は蹂躪され、一步を誤れば黒は左右に兩斷されんとするの勢を呈して來る様な事になる乃ち白四十の曲の一手によりて黒は四十二方面から此の白を攻めるの不可能たる結果を呈するのである、之に反し白若し四十の曲りを打たずして單に四十二と逸出せんか、次に黒より四十四の點に曲られ白若し不利を避けて四十へ曲らば黒は忽ち四十三の點から白の一子を攻る手順となる可く、白若し之を患ひて⑥と二間拓せば黒に四十の點に押へられて右下の一隅は少からぬ不利を醸さねばならぬ。乃て白が此く四十と曲つたに對して黒も亦四十一と自ら備へて徐るに五子の白に迫まらうとし白亦

四十二と活路に就いたので。

此くなつては黒が四十四と曲つても白に悠然として⑥に拓かれる故、黒は先づ右上の自己の地域に厚壯を加へて四十三と迫り四十四以下四十八迄低く白を連絡せしめたのである。

黒四十九の手で假に五十方面より攻めてみるも大利を得る見込なく却つて我地域を荒されるの外ない故先づ自己の地域を擴めつゝ彼に迫つたのである、黒五十一は我大地域を守る最良の點であると同時に暗に中央七子の白に多少の感じを與へて居る。



（局先互法石布）

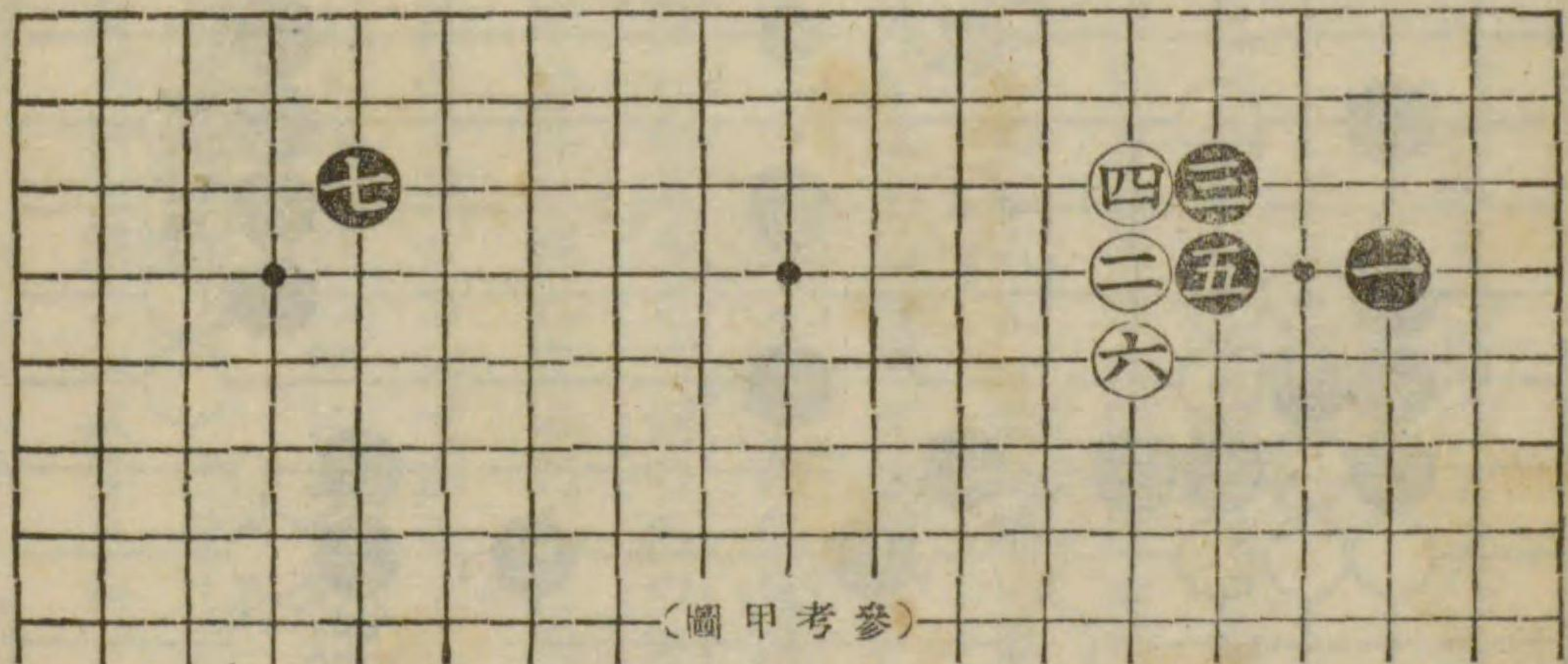
互先第二十六局

黒一に對して白が二と二間高掛に打つのは①と小斜走に掛かるのと主意に於ては大差はない、乃ち②の小斜走掛は黒からの小斜走縮を奪つたのであるが、此の二間高掛は黒一から(イ)と一
間高縮するのを妨げた手である。

「註」此の所若し黒が白二に接觸して(イ)と來れば、白に②の點に縛ねられ不利を招かねばならぬ。

黒三の應手は(置棋の時に白に二間高に掛かれて單關するの
と同意)普通の着手で、白から③と頂けられる豫防をしたので
ある、然し黒が三と後手を引いて他の要所へ白に先鞭をつけら
れるのを嫌らはゞ先づ『參考甲圖』に示す様な手順に打つて第
七の手を以つて隣隅へ着手するがよい。

「註」是は前々局第七十九頁黒五ノ手の説明と同一轍であ
る、黒が他隅へ轉じるのは、單に轉じると白に④と頂けられ

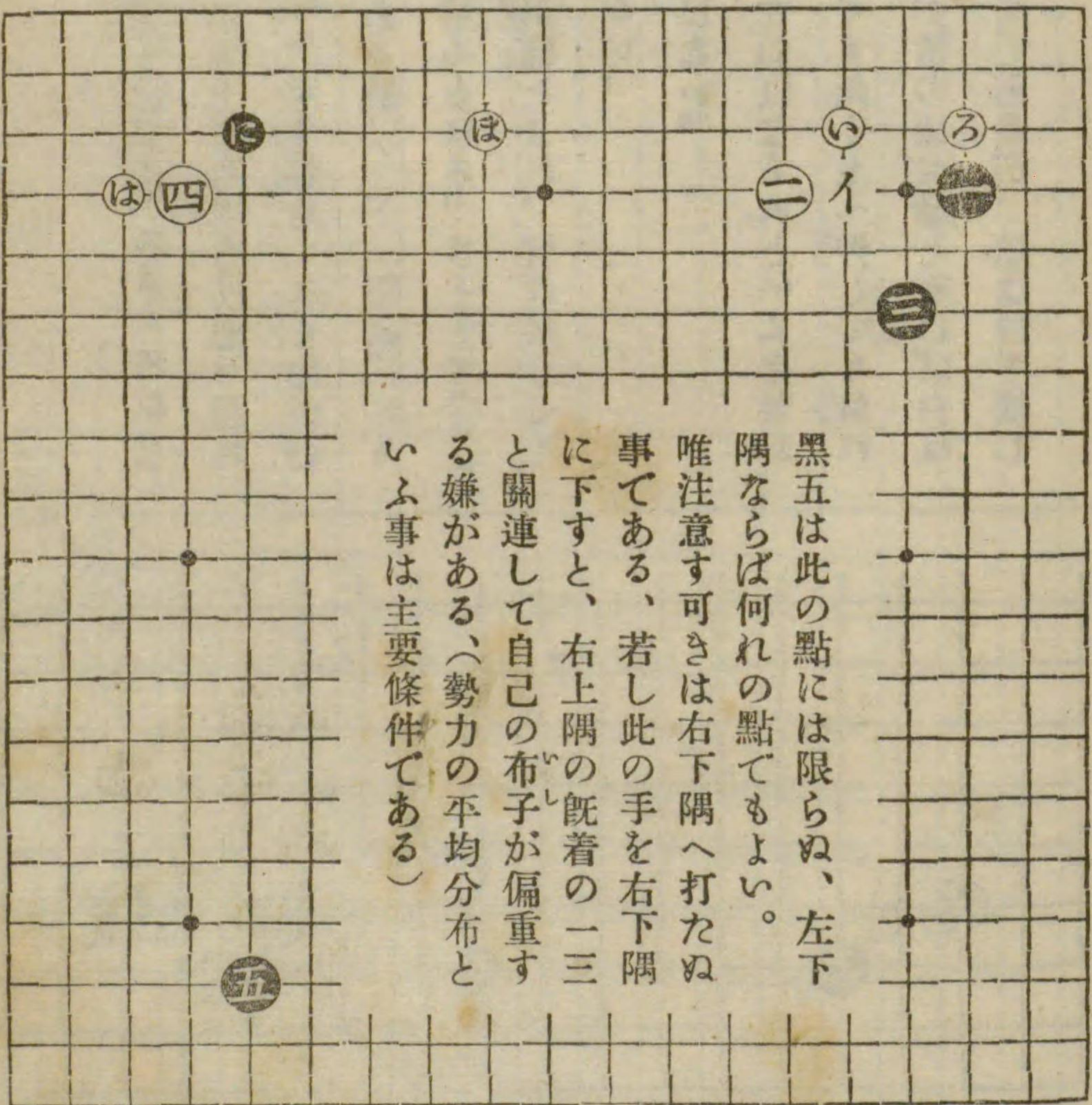


(圖甲考參)

ては其の變化如何なつても黒
の不利である、然し場合によ
りて手拔せぬとは言へぬ、手
抜して白に⑤と頂けられた後
の變化の詳細は定石の部に讓
る事とする。

白四を此く星に打つには主とし
て二の一子との均衡から打着し
たのであるが、或は此の手を以
つて⑥と小目に打つ手が無い
もない。

「註」白四を⑥の小目に打つ
たと假定して後に黒が⑦と掛
つて來れば、白は⑧と三間に
夾む手順になる。



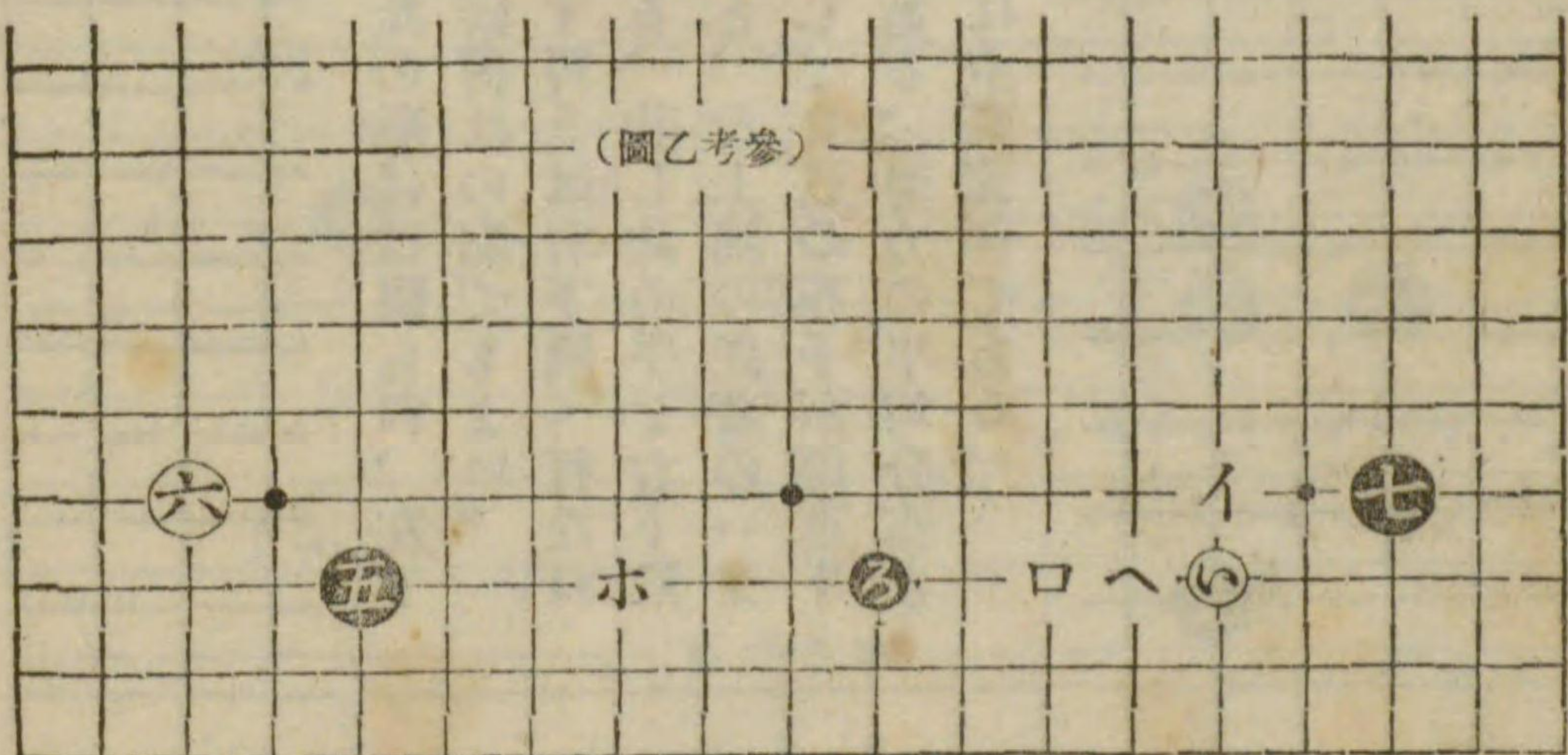
黒五は此の點には限らぬ、左下
隅ならば何れの點でもよい。
唯注意す可きは右下隅へ打たぬ
事である、若し此の手を右下隅
に下すと、右上隅の既着の一三
と關連して自己の布子が偏重す
る嫌がある(勢力の平均分布と
いふ事は主要條件である)

白六は左上星の一子と相待つて左側に大規模の地形を造らうとする策である。

「註」此の場合に於ける白の掛場所としては是より外はない、萬一小目（七の點）にても掛からうものならば忽ち黒に●と同姿勢に導かれて『参考乙圖』に示すが如く次で白が○と掛ければ●と夾まれるの不利がある故（イ）と一間高にても掛るか、其でも尙（ロ）と一パイに詰められる、さりとて（ホ）と夾を打てば黒に右下を（へ）と大斜縮をされ、何れにしても不利の結果に陥るより外致し方はない。

黒九は●と下る普通の着手でも差間はない。

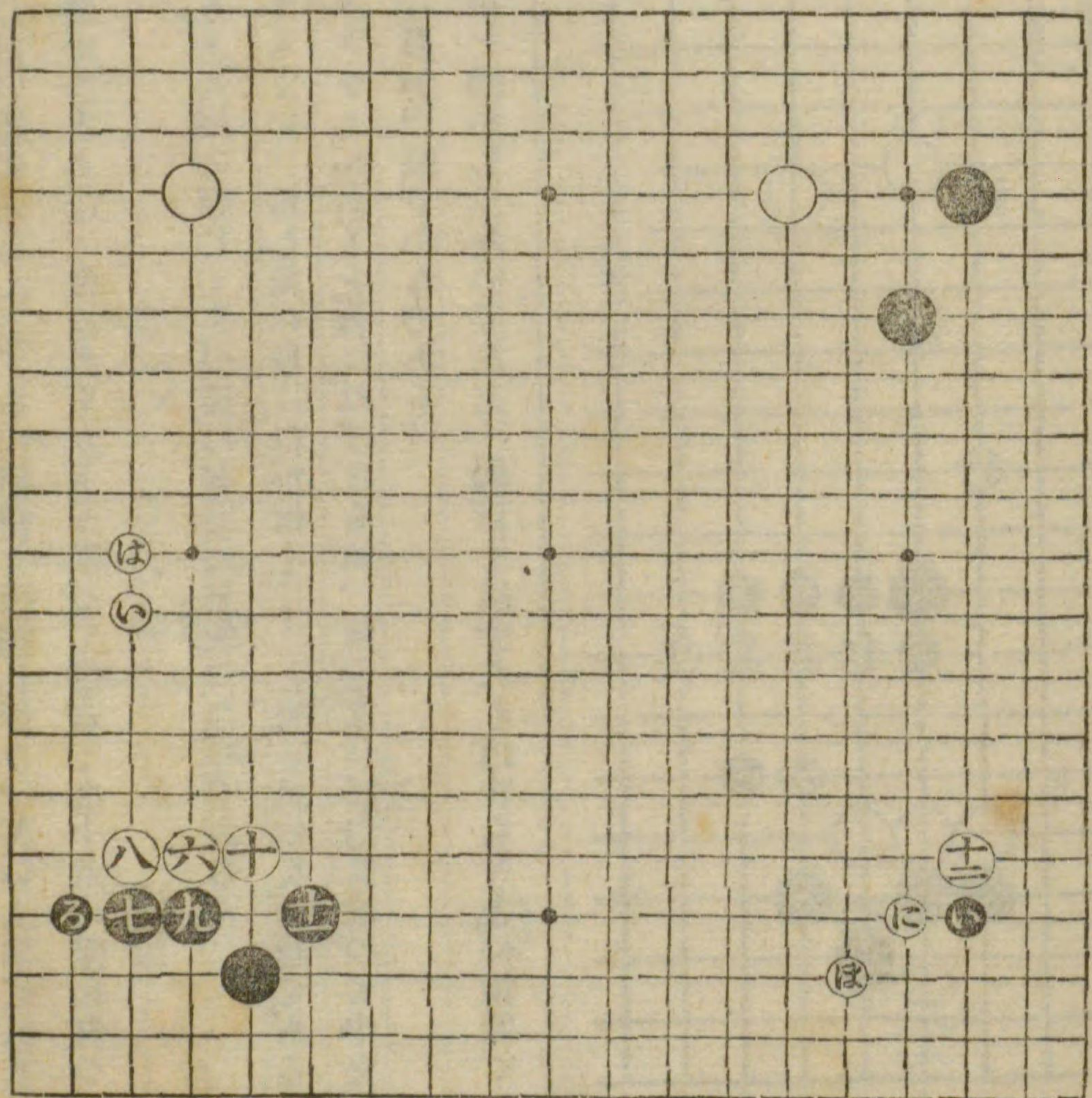
「註」黒は此の場合九と沿うて打たねばならぬといふ必要から此く打つた譯ではない●と下つても此く上へ押しても孰れでも可いのである、若し黒九の手が常の様に●と來れば白は尋常は三間○か四間○かに備へる所であるが、茲は白手拔して十二の點に打つかも知れぬ。



(圖乙考參)

黒が九と押す主意は十と白に行ひられた調子を以つて十一の尖を打たうといふのである、此の十一の尖が出來れば下側中邊への黒の勢力は優秀である、其の代り●の下りがないだけ左側の白も亦利益を保有して居る譯である。要するに一得一失は免れぬ所である。

白十二は或は星に○と打つもよい、又○と目外に打つても差間はない、孰れにしても黒は十三の手で高目に掛るのである、此は隣隔黒自己の布石との關係に由るのである。



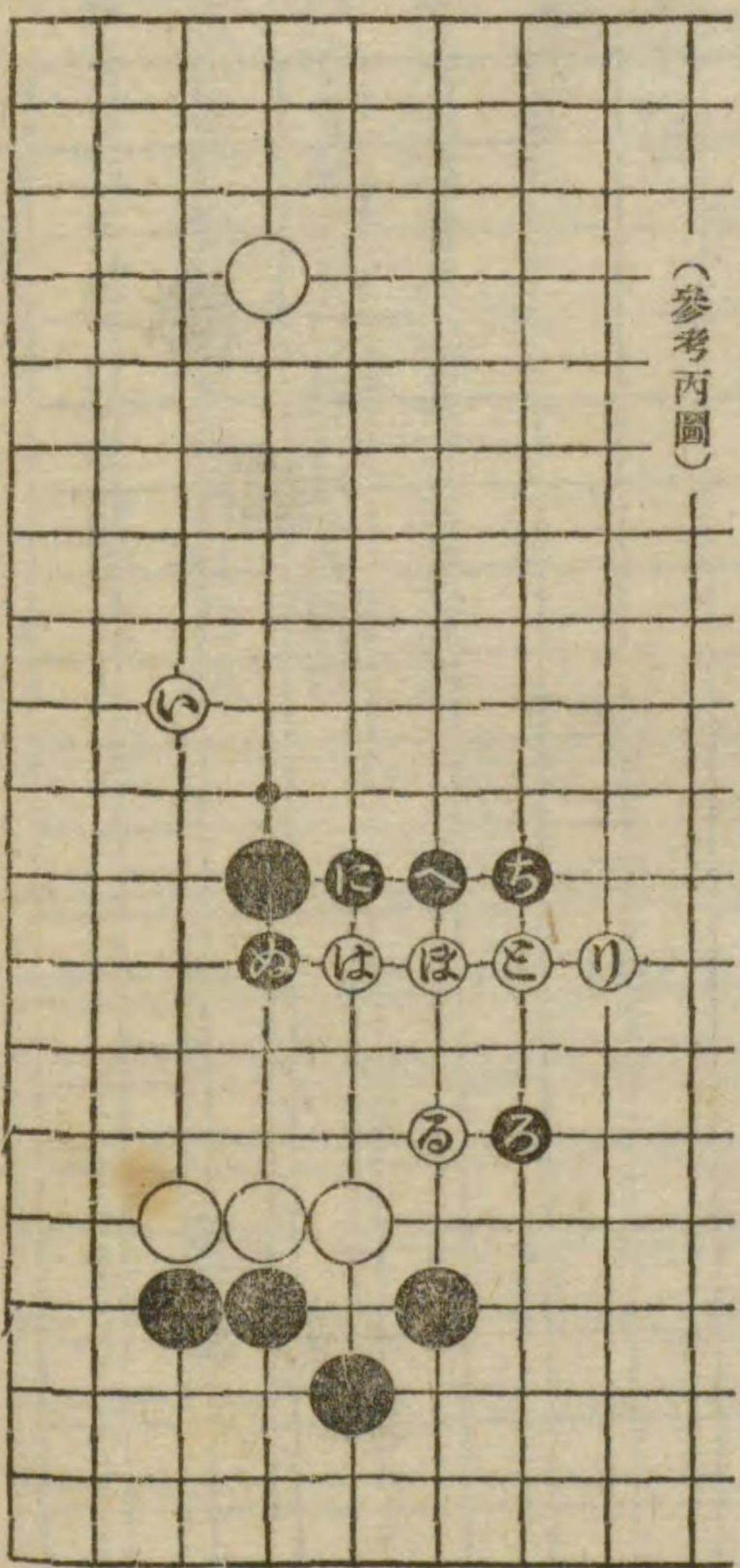
(局先互法石布)

黒十七は左下三子の白を攻めて左側に白の將に造らんとする大模様を蹂躪しやう、といふ手であるから、若も此の時白が直に三子から動いたならば、黒は忽ち左上へ掛つて●若くは十八の點に打つ手順になる。

乃て白は黒に●等と打たさぬため十八と大斜に應じて先づ黒の發展地を奪つたのである。

〔註〕 黒十七は一路低く●と打つてもよい、然し此の所は白が低く(イ)と來る患のない所であるから此く一路高く打つておく方がハタラクがあると言はねばならぬ、何となれば白に迫つて中央へ飛躍する際に一路づゝ先きに進む事が出来るからである。

黒が此く十七と打つたのは三子の白を動かして置いて左上へ●若くは十八と迫まらうとの策戦であるから白も亦黒十七の謀の裏をカいて十八と打つたので、然らば黒は十七の手で先づ●と掛つたならば如何か、といふに其時は白に④と三間夾の逆襲をされる故左様は打てぬ、此く兩者互に策戦の秘術を藏しての一進一退實に興味津々たるものである。

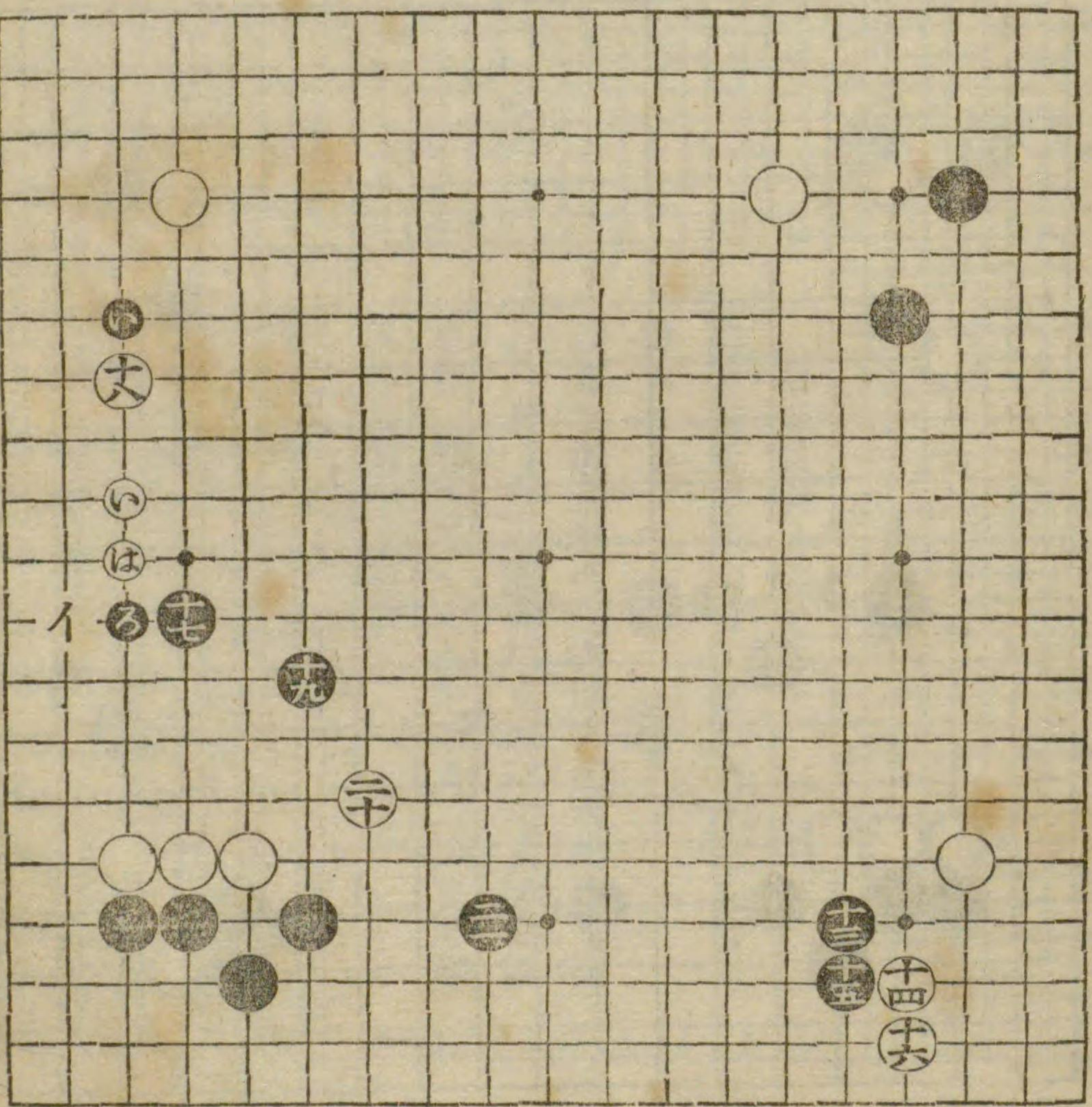


(参考丙圖)

□問、白十八を躍進して⑤の邊に迫つたならば、其の結果如何に變化するか。

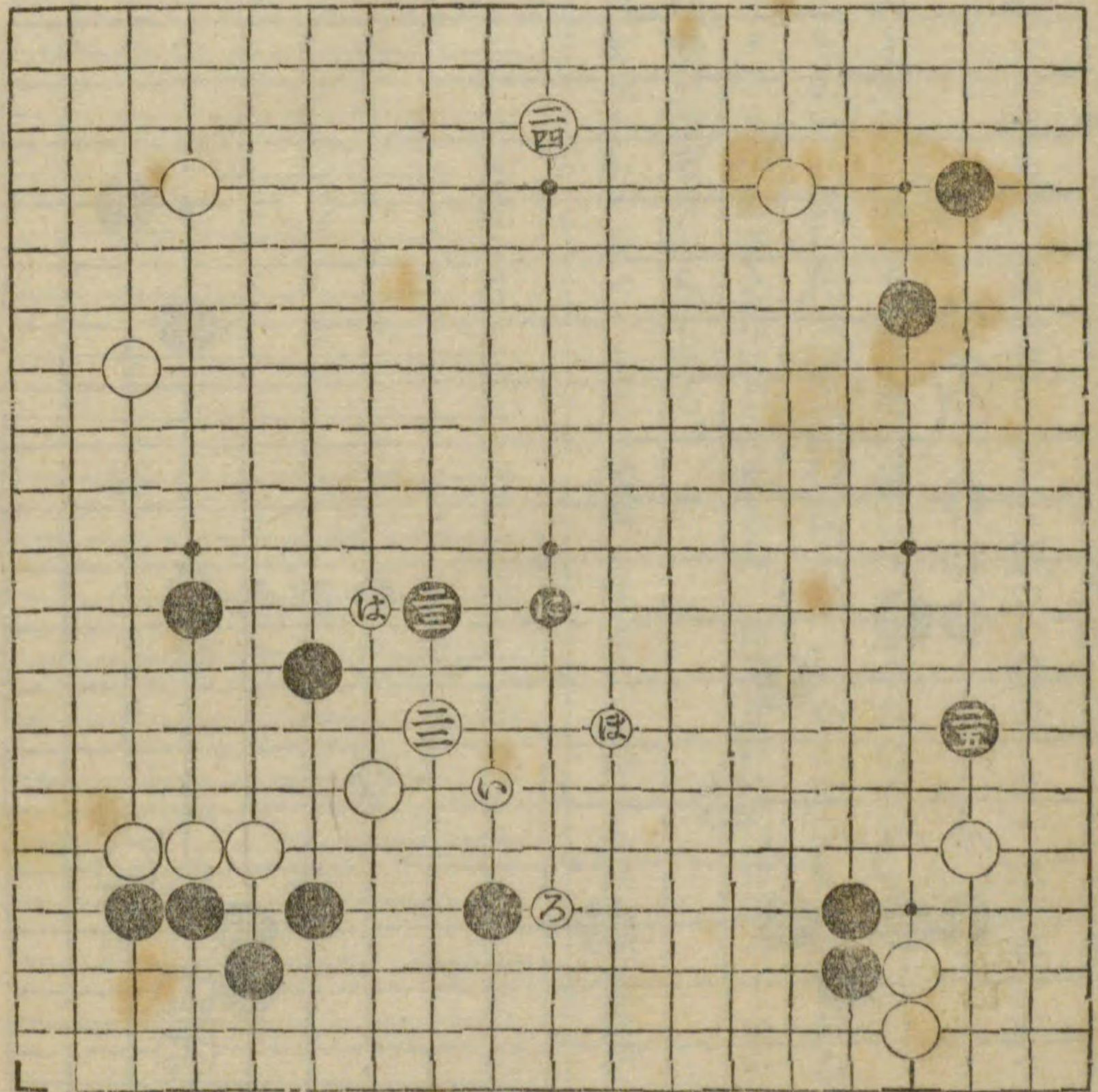
○答、すると黒に二十の點から迫られ『参考丙圖』符號順の様な結果となり、⑤(十八)の一子が此の黒の堅壁に接するの危険を醸す事になるから甚だ面白くない、其で此く控へて大斜走したのである。

黒十九は三子の白を二十と動かして二十一の手を迫り出し、自然の手順を以つて自己の防備を加へつゝ白を攻め立てる巧妙な手段である。



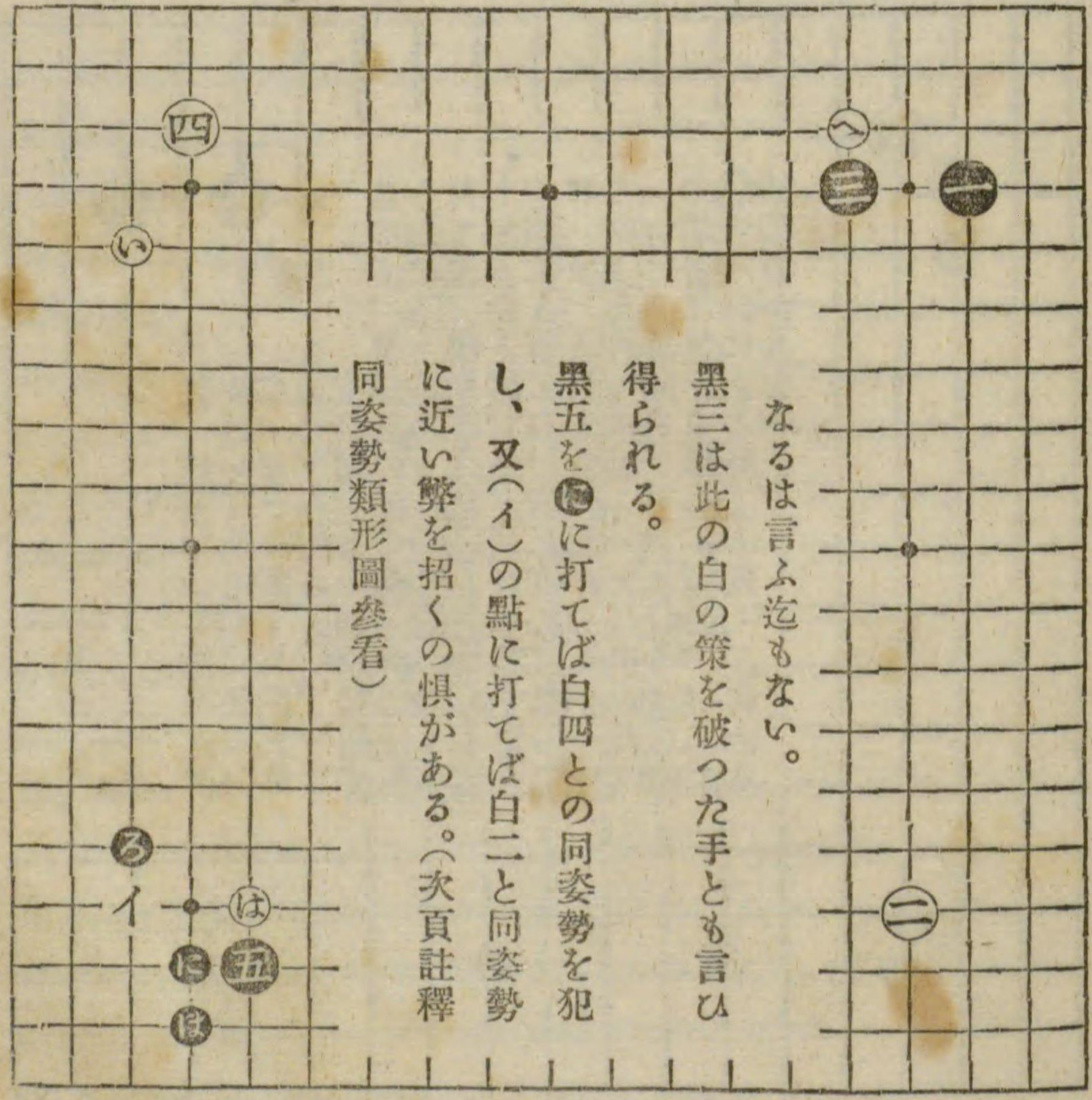
局先互法石布

白二十二の手で④と單關するのと此く尖むのと二通りの打方がある、④と飛ぶのは次で下側へ向つて⑤と頂けやうといふ手である、本圖の尖は、④の斜走掛を覗つて居るのである。乃て白が若し④と飛ばば黒は手抜して上側二十四の點に打つのであるが、此く尖まれては手拔も出来ぬ故、二十三と打つて④の掛けを防いだのである。黒二十五は要點である、或は先づ④と迫り白に⑤と二間に應ぜしめてから二十五と打つも敢てあそくはない。



第貳拾七局

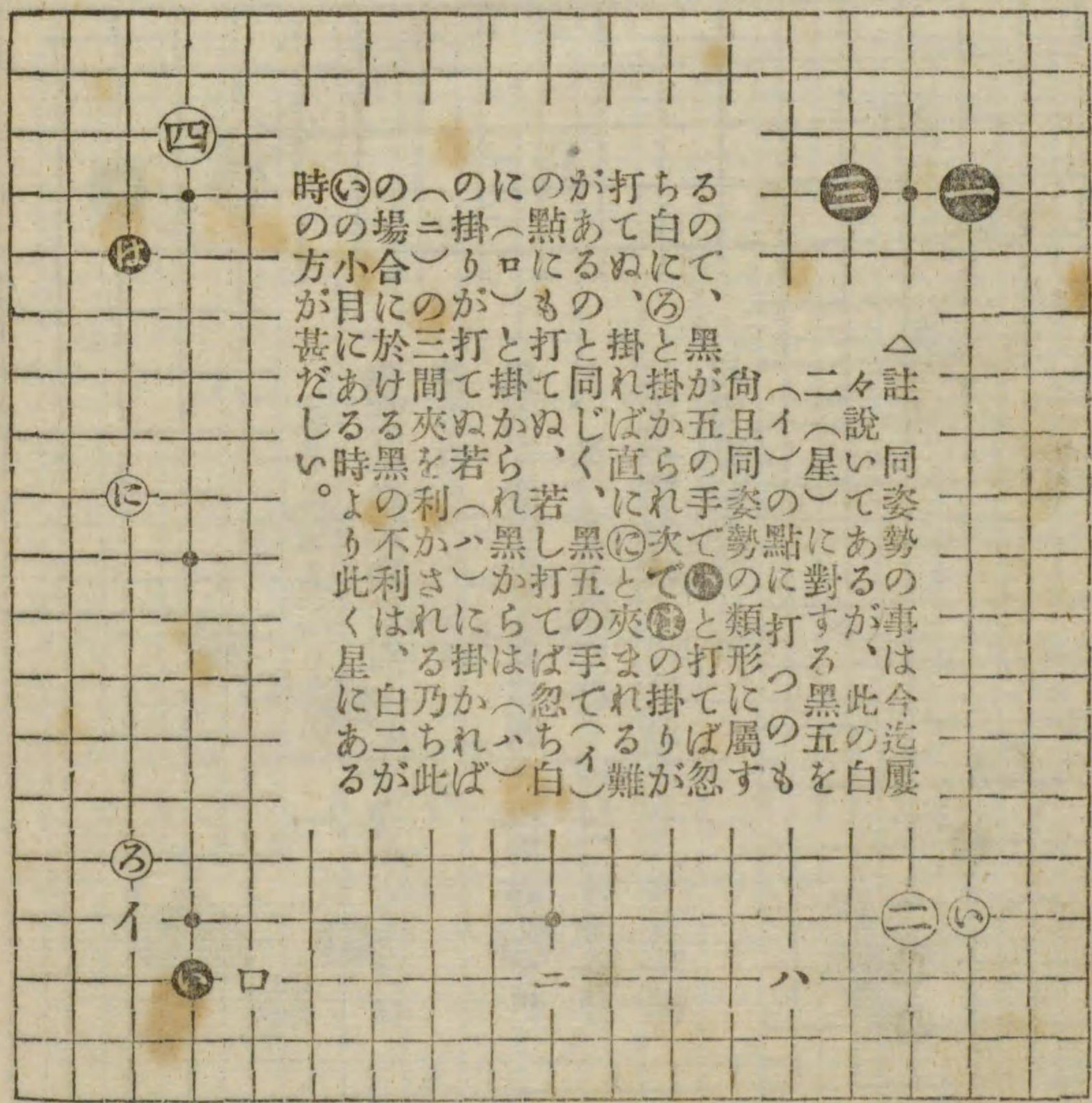
白が二の手を此く星に打つたのは些か策の存する手で、其は黒に四の點に打たせ、白は④と掛かり、黒に⑤と左下隅外に打たせて、白は高く⑥と掛かり、黒⑦、白五、黒⑧の手順を経て、白は茲に先手を取つて右上隅に⑨と掛からうといふ策である。△註 黒一、白二、黒四、白③、黒④、白⑤、黒⑥、白五、黒⑧、白⑨と打つ手順が、何故白の注文であるかと言ふと、此くの如き手順に運び得たならば、右下一隅は當分白の獨占で、他の三隅は白が孰れも掛りを打ち、黒の獨占を妨げて居る形である、即ち白の有利



なるは言ふ迄もない。黒三は此の白の策を破つた手とも言ひ得られる。黒五を④に打てば白四との同姿勢を犯し、又(イ)の點に打てば白二と同姿勢に近い弊を招くの惧がある。(次頁註釋同姿勢類形圖參看)

△【参考假定圖】(前説繼續) 白
 二の意中を付るに略前述の如し
 とすれば即ち以下記す『参考假
 定圖』の様な形になる乃ち此の
 形に於ては、白が第十の手で右
 上に㊦と掛かつた次に、黒から
 ㊧と下側に打つたとしても白は
 悠然として右下より㊨と大斜走
 しておけばよい、若又黒が㊩と
 來ず、右下白二に掛つて(イ)と
 打たば白は之を三間夾にして下
 側星下に(ロ)と打つ手順にな
 る、即ち何れにしても白二が小
 目(ハ)の點にあるよりは此く星
 にある方が打ち易い。

(圖考參形類勢姿同)

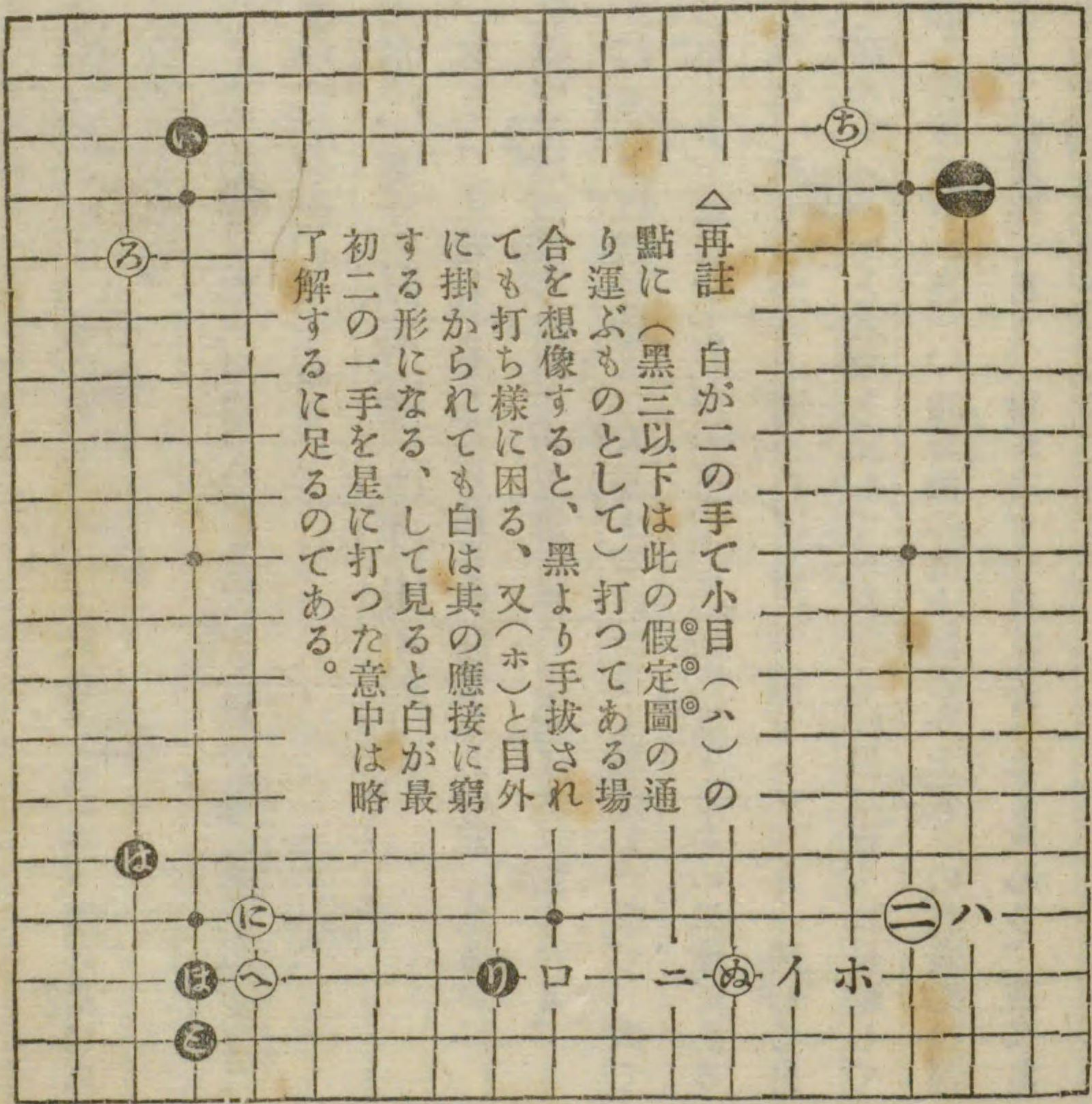


△註 同姿勢の事は今迄屢々
 説いてあるが、此の白
 二(星)の點に對する黒五も
 (イ)の點に打つのも
 尙且同姿勢の類形に屬す
 るので、黒が五の手で㊦と
 打ちぬれば、白は㊧と打
 ちぬれば、黒は㊨と打てば
 打てぬ、掛れば直ぐ、黒
 があるのと同じく、黒五
 の點にも打てぬ、若し打
 の掛りが打てぬ若し打て
 (ニ)の三間夾を利かされ
 の場合、小目に於ける時
 時の方が甚だしい。

△註 初白が若し二の手を小目

(ハ)の點に打つて居る時に、此
 の假定圖の様な風に運んだも
 のとすると黒が十一の手を以
 つて㊫と來た時、白が右下
 (ハ)の點から(イ)の點に大斜
 走締りをして見ても、黒から
 は悠々として(ニ)の點に二
 間拓される、且つ亦黒は㊬と
 打つ手で、右下小目の白(ハ)
 に掛つて高目、目外若くは大
 斜走の諸點からいろ／＼打た
 れる惧もある。

(圖定假考參)



△再註 白が二の手で小目(ハ)の
 點に(黒三以下は此の假定圖の通
 り運ぶものとして)打つてある場
 合を想像すると、黒より手抜され
 ても打ち様に困る、又(ホ)と目外
 に掛かられても白は其の應接に窮
 する形になる、して見ると白が最
 初二の一手を星に打つた意中は略
 了解するに足るのである。

黒七は白より二間若くは三間に夾まれるのを豫防したのである。

△註 白が黒五の一子を④若くは七の點に夾むのは、單に黒五を攻めるに止まらず右下隅の星にある白二の位置より見ても好拓たるは言ふ迄もない。

黒九は右上の一、三の拓として大場の利を占め、同時に左上白四、八からの拓を制限した好着點である。

黒十一は右上の我が地域を擴めつゝ、④の打込を覗ふ手である。

白十二は④の點への打込をも意味して居る、黒十三は之に備へた手と見ればよい。

白十四は黒④の打込の防備を兼ねて、次に(ハ)に冠して右上の黒地を侵略せんとの意である。

△註 白の手が(ハ)に來れば自然に④の打込の手も出來て右上隅の黒の宏壯は大に削られる。

白十八は普通④と尖む手である、白が④と尖めば黒は④と二間拓するのが最も適應した手で、次で

白は此の④の二間拓に對して④と詰め返すか、或は右上に向つて(ハ)の點に冠するかの二途である

白十八の手で④黒十九の手で④と運んだ時、次で白が④と詰めれば黒は右側を(ハ)と一間して白

からの冠を拒んでおく、若又白が④と詰めず(ハ)と右側を侵して來たならば黒は直ちに長驅して

左上白四、八の裾に向つて④若くは④と突撃するが良い、乃ち此の右上側と左上側との打着點は黒

白何れよりするも攻守兩様の意味に通じて好着點であり、白が右を守れば黒は左を攻める、若又白

が左に備へれば黒は右を守る、之を双方見合の場所といふのである。

△註 此の數行の説明は盤面の

石を假に白十八を④に尖ませ

黒十九を④に二間拓させてお

いて然る後講義の順序通りに

黒白を互に置きかへて翫味す

ると意味判然する。

白十八は黒に④と二間拓をさせ

ぬ策である、乃ち十八以下二十

四迄の手順を履んで、茲に先手

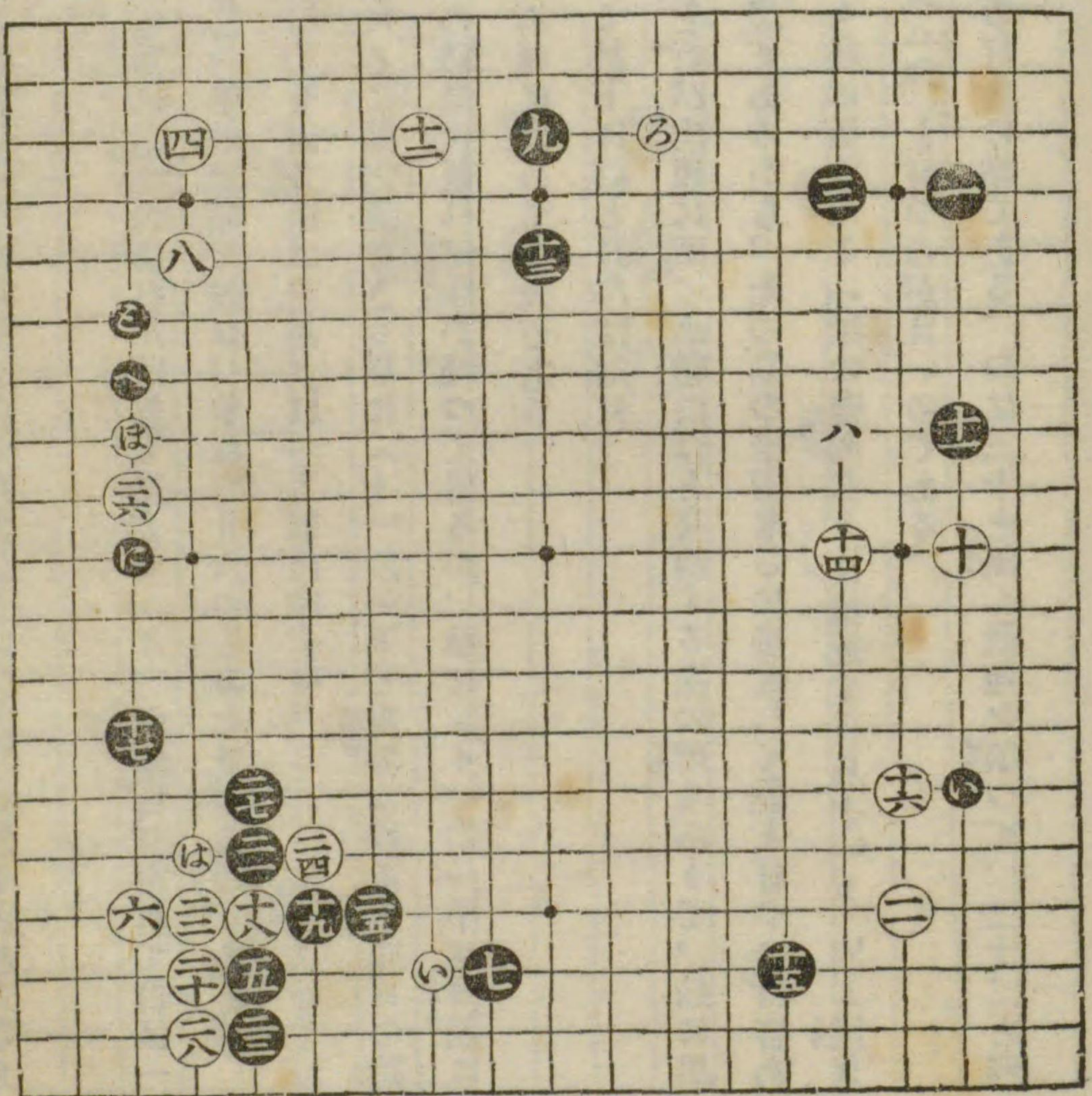
を取つて二十六の好點に先鞭を

着け得たのは白十八の策の成効

したものと見る事が出来る、然

し此の結果が敢て黒の不利を來

したといふ譯ではない。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



△問 前圖白十八以下二十四迄の手を打たず、十八の手を以て左側二十六(△印)の點を占めたならば如何の結果を來すか。

○答 白十八以下の手順を履まずして單に二十六に打たば忽ち黒より(イ)の點に打たれて白は一隅に封鎖される、乃ち白は此の(イ)一手の封鎖を嫌ひ、兼ねて廿六の先鞭を計つたのである。

□再問 本圖十八以下黒二十七に到つても尙且白は封鎖されたる形に非ずや。

○答 本圖の結果も等しく是れ封鎖たるには相違なきも單に(イ)の一手で封鎖されると同日の論でない、且つ十八以下白二十八迄の結果に觀れば味が残つて居るが、單に(イ)の一手で封鎖されては少しも味が残らぬから白の不利は極めて多大である。

△問 白二十六△印を更に一步進めて星下に(ロ)と打たば如何。

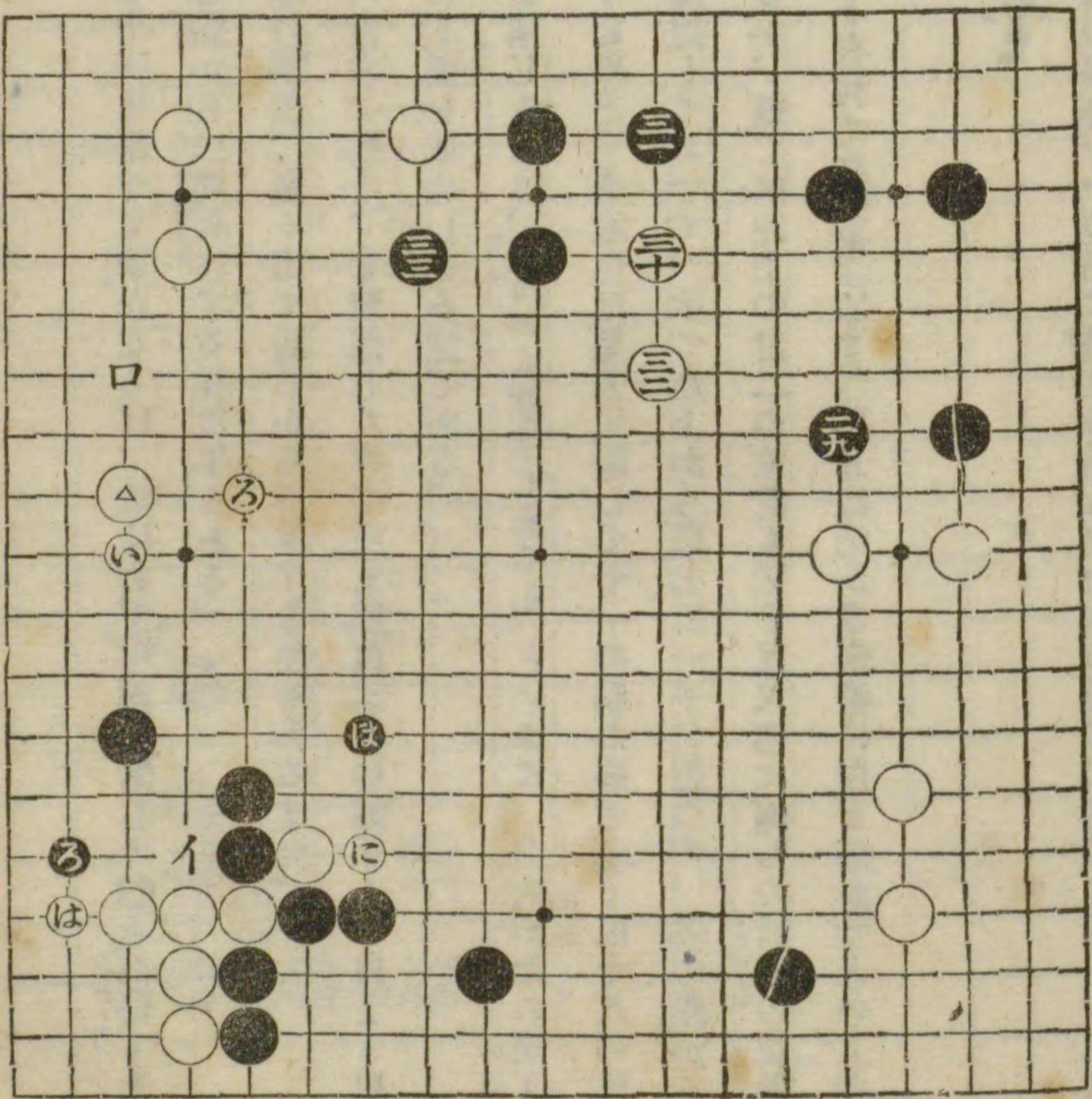
○答 左下隅應接の結果黒は二十七と行ひ尙後に至て黒(ロ)白(ハ)と交換する様の理もありて、茲に黒の堅固な壘が築かれるは觀易き道理であるから、此の黒の堅固なるに接近して(イ)と打つは百害あるも決して寸毫の利益はない、即ち棋の通則たる『敵の堅固なるに接近す可らず』といふ遠慮を以つて此く一路控へて二十六(△印)と打つのが良いのである。

黒二十九は右上我地域の大有保持する好良の點である。白は三十と淺く敵地を削つて、三十二と軽く引上げたのである。

黒三十一の應手は、慣用の手である。

黒三十三は白の左上の地を削ると同時に(ロ)の打込を覗ふ手である、のみならず暗に三十、三十二の二子の白にも感じを與へてをるのである。

△註 茲に於て次の白手を想像すると、先づ(ろ)と左側を飛ぶ位のものであらう、白(ろ)の飛は黒より(ロ)に打込む手を拒ぐと同時に次で(に)と押さうといふ手を觀てをるのである、随つて白が三十四の手で(ろ)と飛べば、黒は(ろ)と左下に向ひ白に(ハ)と應じさせて(ハ)と打つて白の一子を擒にしてあく可きであらう。



~~~~~(局先互法石碁)~~~~~


第貳拾八局

黒五は十二と打ち次で白が六の手で十三に掛つて來たならば、黒は右下白四に對して●と高掛りを打つ伏線として先づ白十三を十九の點から二間夾にする様な手もある。

△註 此の假設の手順は已に從來の講義に屢々出て居るから詳説する要もあるまい。

黒五を此く小目に打つたのは、次の白六、黒七、を豫想した手で左上隅白二との關係上、白より黒七に對する左側方面の詰手に多少の不便を感じしむる意である。

△註 白より左側の詰手に不便を感じるとは、如何いふ意味であるか、といふに、白六が此の黒より七と夾まれた場合の應手は種々あれど、普通白は黒五に對して十一の點の掛け若くは十八の點の二間飛等の手を用ゐて黒五を壓迫してゐいて、次で左上から黒七の一子に迫つて、●の點から詰るといふのが常用の手段であるが、茲では左上の白二の位置も低く且又側に偏した目外の位置にあるから、此の●の詰は、あまり有利でない形になる、黒五は此かる形勢に白を導かうといふ意を含んでをると見るのである。

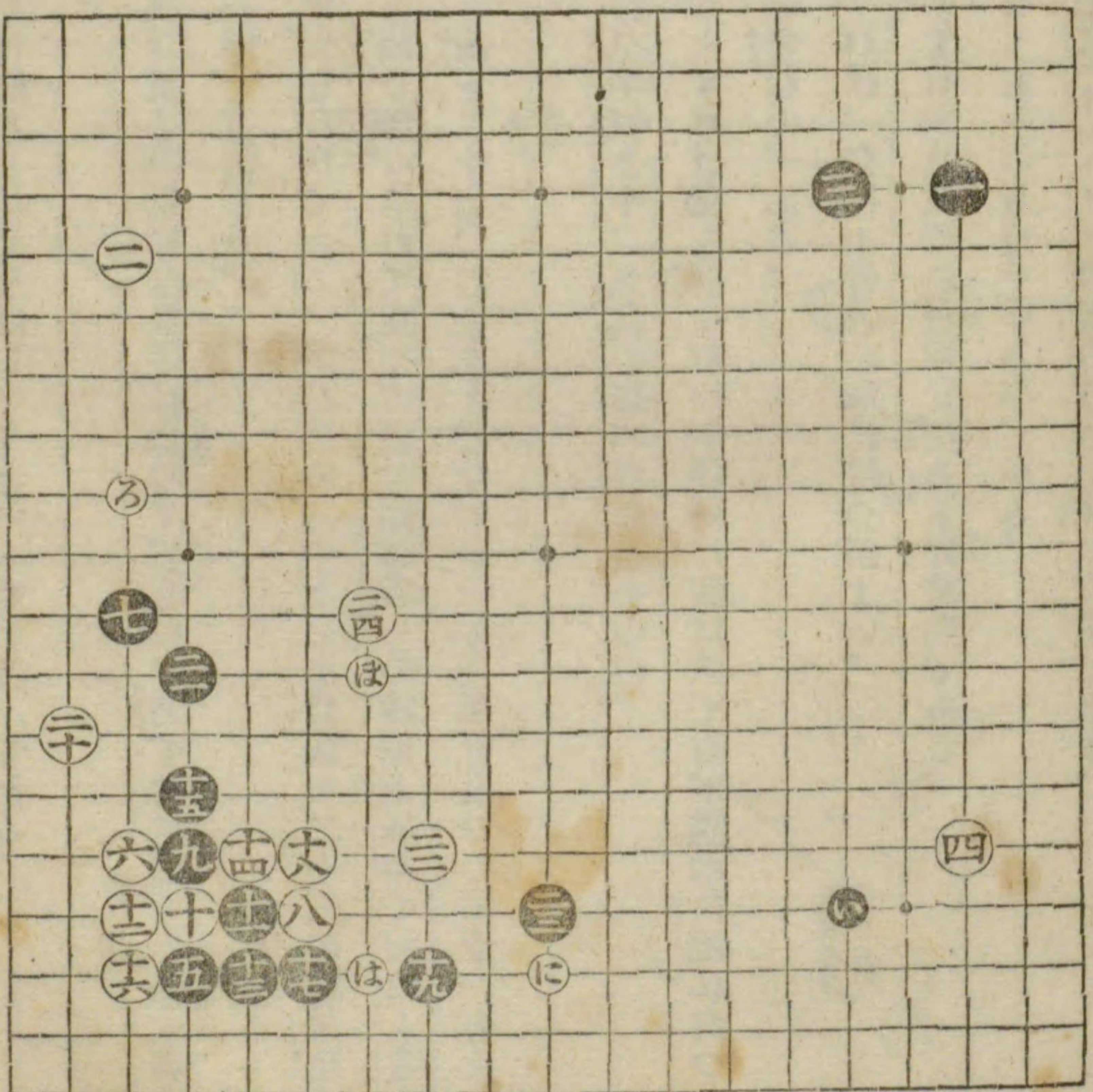
白八は此の場合止むを得ざる手である。

△註 何故なれば前説の通り白が此の場合十一の點に掛ける手も亦十八の點に二間飛する手も（次

で打たうとする●の詰があまり有利でないから、打ち難い然りとて黒五を●に二間に夾返して見ても、次に黒十一に尖み白●に二間拓する姿勢が右下隅の布石と調和せぬ結果になる、其故白は此の場合に適應する手順として大斜掛けの手段に出たのである。

白八に對する黒九の頂け以下黒二十三迄は普通定石である。

黒二十四は普通は●と打つておく處であるが此く一路大飛躍したのは左側四子の黒を左上から壓する勢を示す上に多少の高壓力が利いて居る。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



白二十四(△印)は若し黒が手拔すれば○から黒を攻略しやうといふ意を含んでをる。  
黒二十五は之に備へた手である。

△註 此く運んだ結果局面に於ける黑白双方共別に急な手は残つて居らぬ、乃て白は現下の最大場たる左上隅に二十六と打つて此の一隅を占領した。

黒が二十七と右下隅に掛つたのは是亦大切な所である、若し此の二十七を小目即ち二十八の點に掛つたならば、忽ち白に二十七の點から掛け壓せられて左下方面の黒布石との關係上極めて面白くなる、乃て多少の不利を忍んで高く掛り二十七、二十九と打つておいて先手を取つて三十一と上側の利益を獨占したのである。

△問 黒三十一は右側星下○の邊に打つ手無きや、又其の時の白の應手如何。

○答 右側星下は位地低し、若し打つとすれば○と高く打つが佳い、其は次で右下隅の白地に向つて○と一バイに詰めやうと云ふ手を含むのである。

黒若し三十一の手を右側へ○と着手すれば、白は上側○の點に打つがよ。

黒三十三は左上隅白からの拓きを妨げて右上及上側の我地を擴める好着點である。

黒三十五は右側の白地の厚壯を削りつゝ右上の我地を守る手である。

白三十六は右下の白地を手厚くして暗に(イ)(ロ)の邊の打込を覗つた手である。

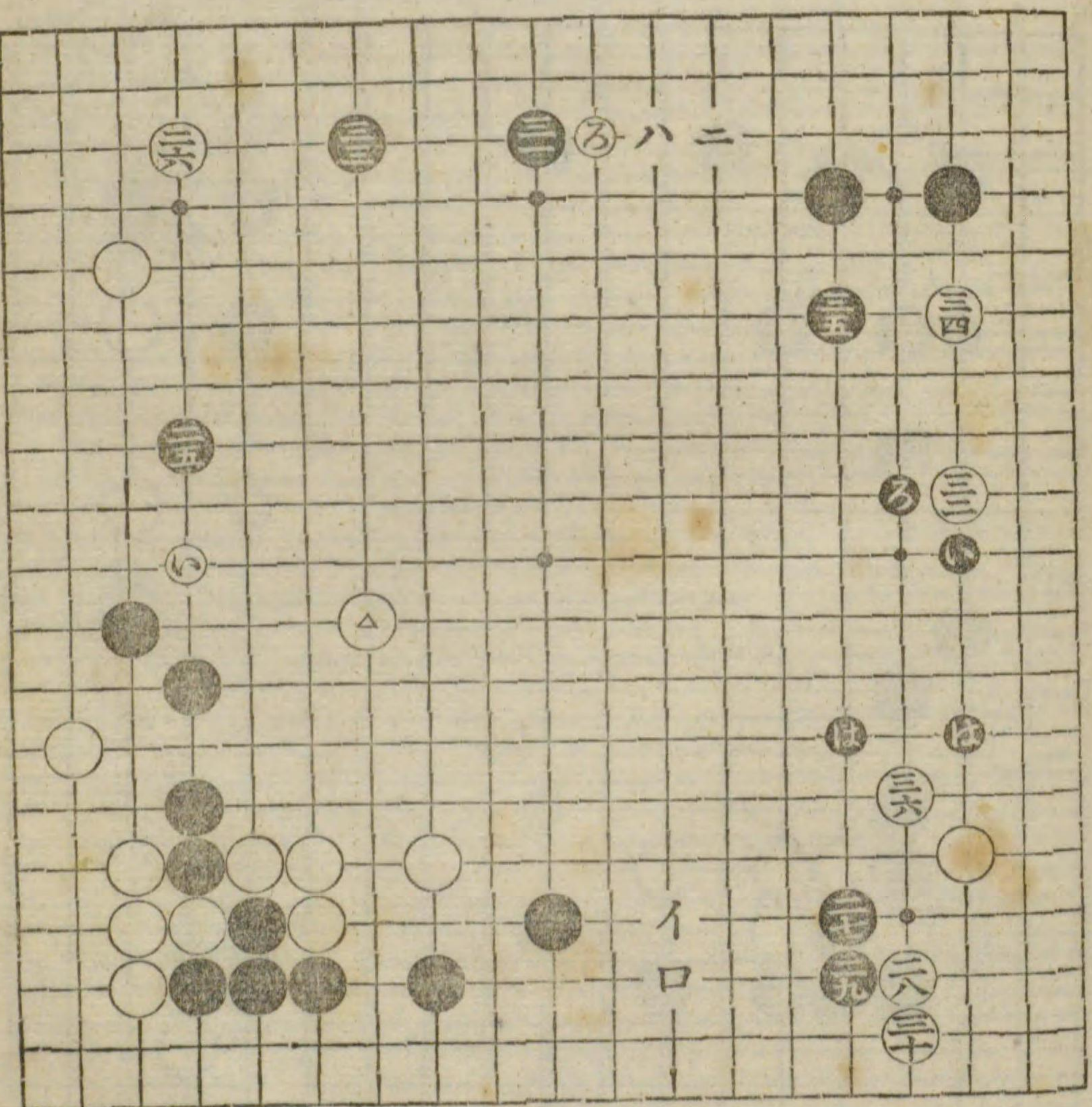
△註 白が三十六の尖みを閑却

すると黒から○の邊に高壓され、爲めに右側の白地が稀薄になるばかりでなく下側(イ)(ロ)邊への白の打込も利かなくなる。

△問 黒に三十三、三十五と打たれた後は上側(ハ)(ニ)の邊へ白から打込む手はなきや。

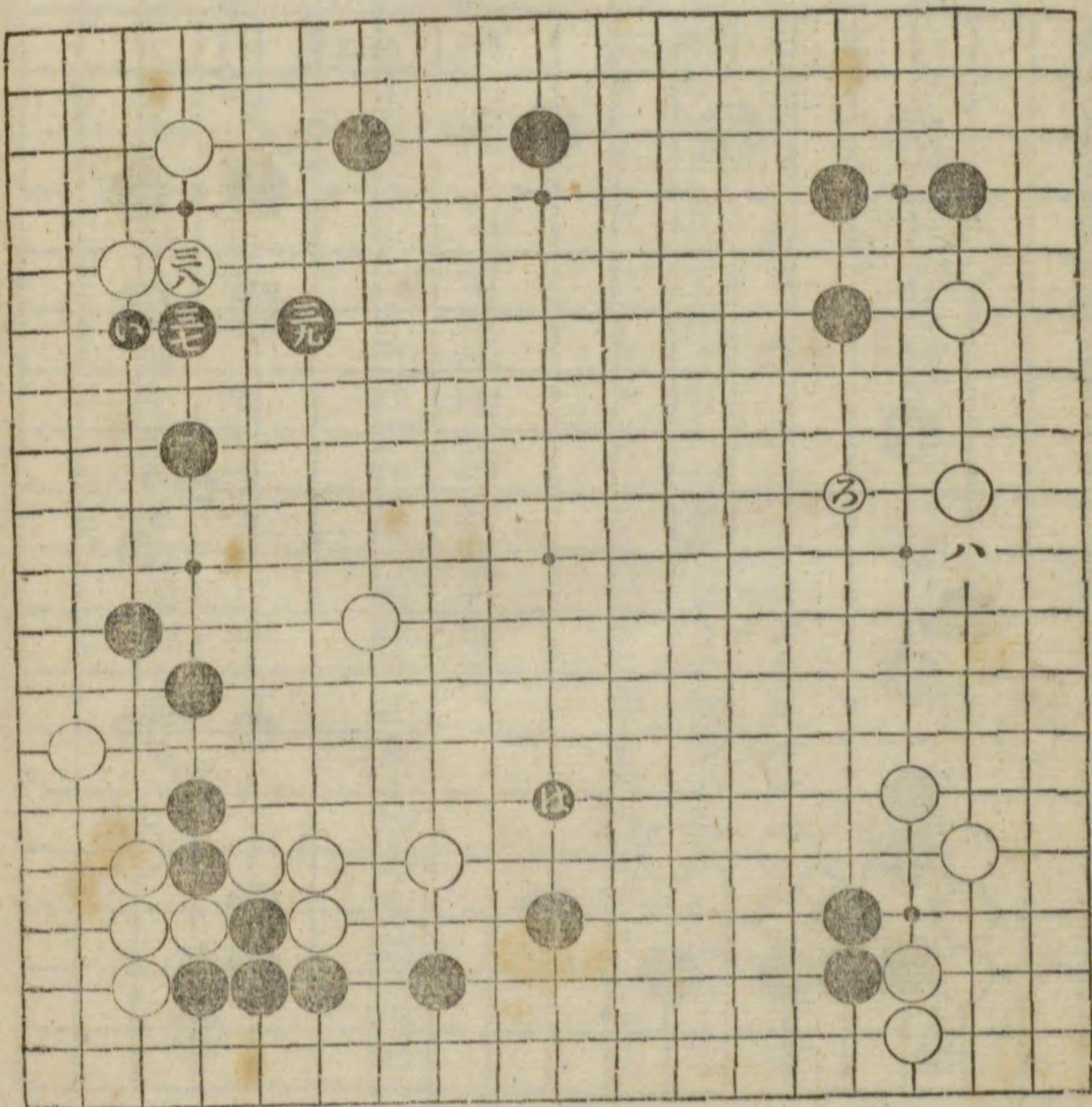
○答 打込む手のない譯ではなが此く左右共黒の勢力が旺盛で且つ白の聲援のない處は窮屈で、容易に打込めぬ。

△註 打込といふ事には自ら系統がある時機がある、成算なくして重地に入る事は慎まねばならぬ。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~


黒三十七は白若し手抜すれば直ちに●と押へる手である。白三十八の行びに對して黒三十九の間飛は輕妙である。此く三十七、三十九と黒の勢力が左上に加はつた以上は白から容易に上側へ打込む事は出来ぬ。△註 黒三十七、三十九は露骨に左上に迫つて暗に上側を守る。巧妙な手である、且つ遠く下側黒地に聲援を與へて居る。次の白手を想像すると○の飛であらう、何となれば若黒より此の點に冠すると忽ち(ハ)へ頂けられる手が出来て大打撃を蒙るからである、白若し四十の手を○と飛ばば黒は徐ろに○の邊より兵を進めて、中央四子の白に迫りつゝ、下側を防備を計る可きのである。

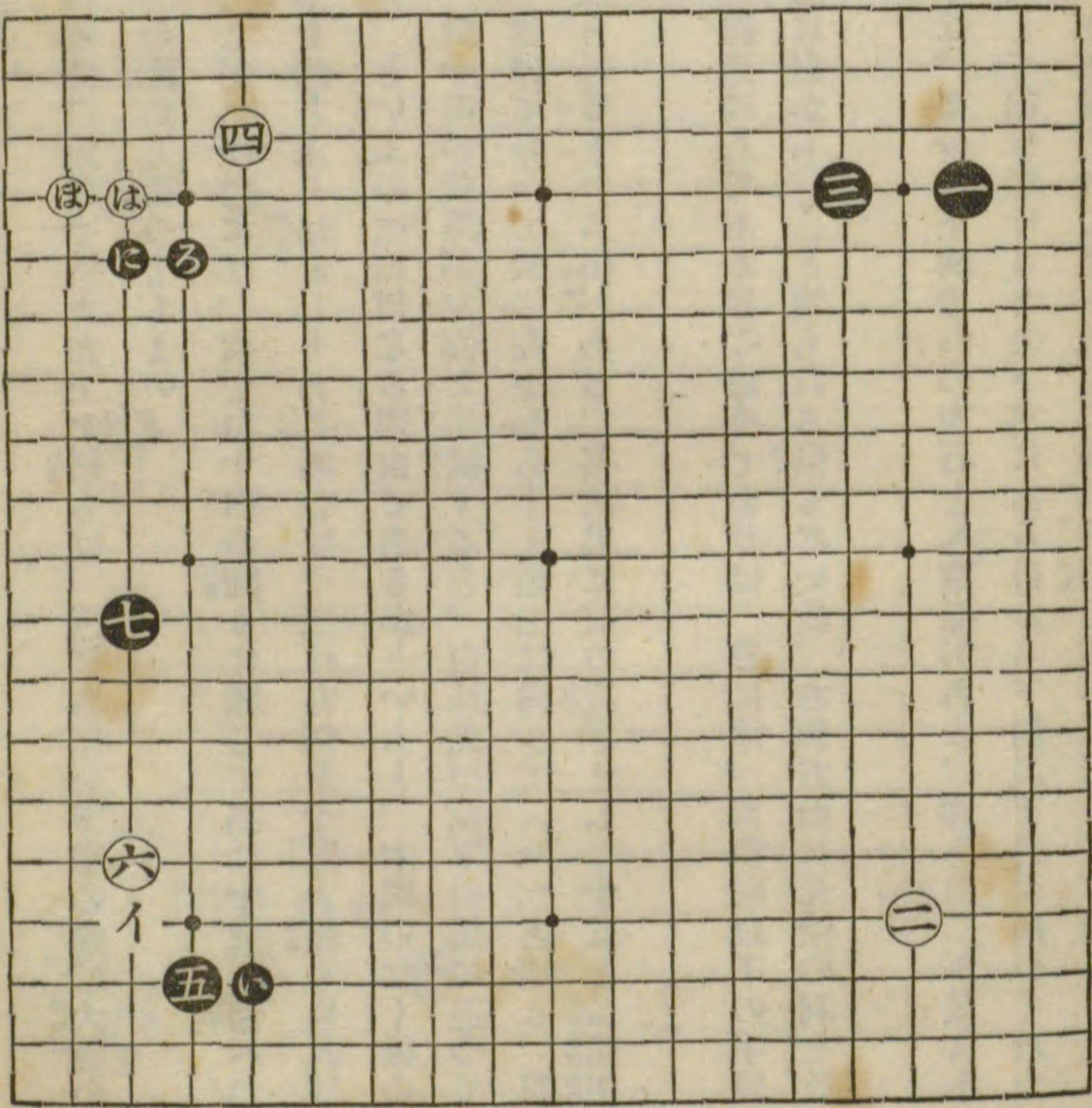


第二十九局

黒五は或は●の點(目外の位置)に打つても差支はない。

「註」然し此の手で左下の目下即ち(イ)の點に打つたならば如何かといふと、其は考へものである、何故なれば白に●の點に掛かると右下隅に對して稍同姿勢の類型となる嫌があるからである。黒七の三間夾は●の高掛を含んだ手である。

「註」白の應手如何により、黒に先手が廻れば●と高く掛り、白は●黒●白●運ばうといふ策である。



黒十三の手は、或は●と斜走してもよい。
 黒十三を●と斜走したと假定し、其の際白が尙十四と左上を締らば、黒は右側星下●の邊に大場の利を占めるか或は右下に向つて(イ)の點から掛つてもよい。

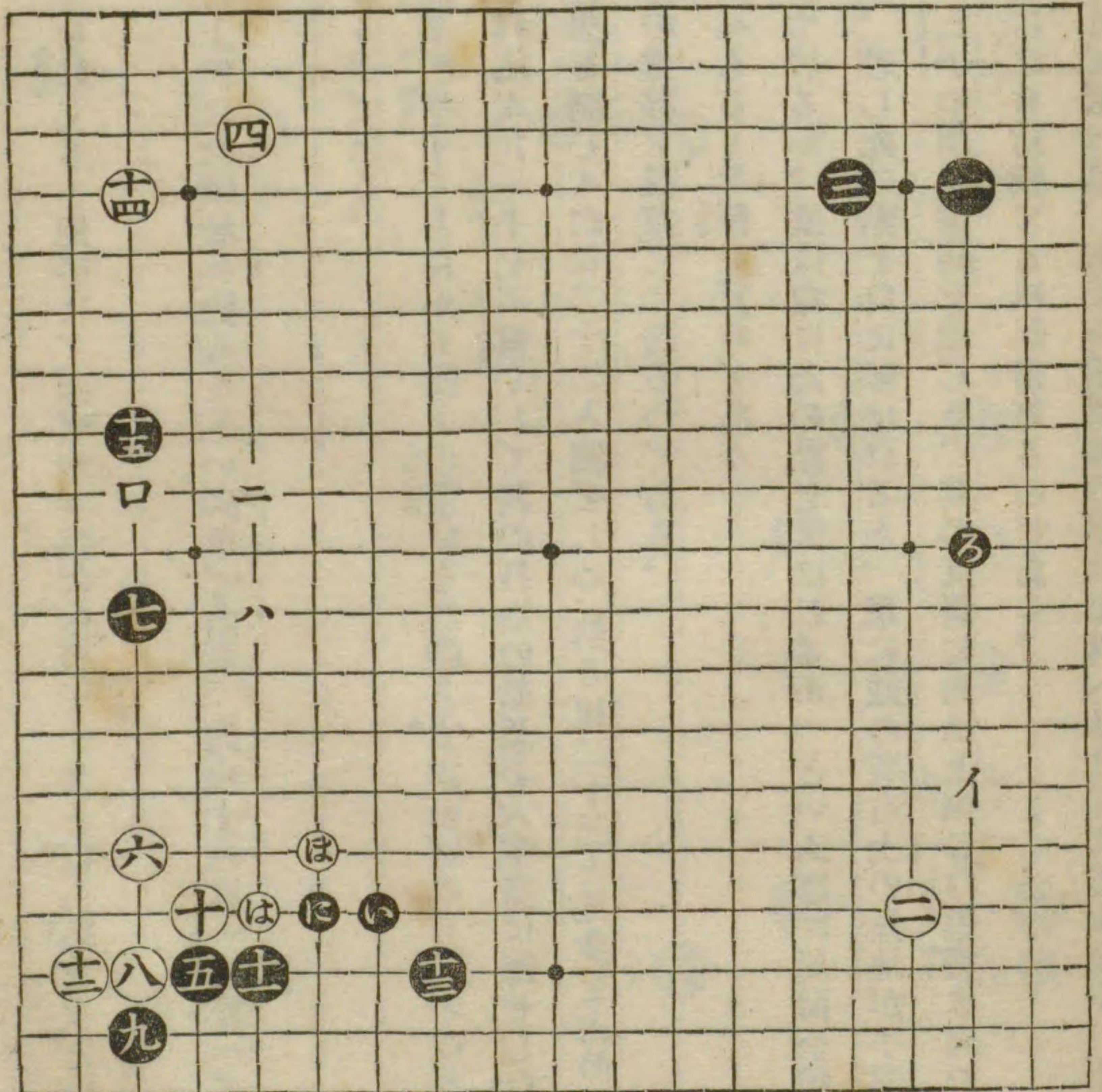
「註」本圖の如く下側へ低く十三と備へた時には、次で白十四の締りに應じて黒は十五と備へねばならぬが、若し此の黒十三の手を●と高く斜走してある場合は、黒は左側を十五と拓くに及ばぬ手抜して右側に着手してもよい、といふのは如何なる理由であるかといふと、本圖の如く黒の十三が低く二間拓である場合は、白十四の後黒が左側を手抜すると、白は先づ左下の黒に迫つて●と壓し、黒●白●黒●と交換を遂げておいて次に左上から——黒七に向つて(ロ)と迫り、黒(ハ)と一間飛した時更に(ニ)と攻られるといふ惧がある、其故黒は其の凌ぎとして十五と二間拓せねばならぬ。

然るに若も黒十三が一路高く●と斜走にしてある様な場合であれば、茲に述べた白●以下の手段が行はれぬから、随つて黒七は急に白から(ロ)と迫られる惧もない故、右側方面に先鞭の利を収める事が出来るのである。

尙黒十三の手を此く低く備へたのは、多少右下隅の白の布石とも關係がある、即ち白二が星にある爲め、十三の手で●と高く斜走して裾を明けると右下星にある白から下側星下邊に向つて最大飛躍を試みられる様な趣もある、が本圖の如く黒が低く二間に手堅く備へて居れば、白から直ち

に此の方面へ廣い拓の手を以つて迫つて見ても一向其の効力がない。

以上黒十三の位置に關する詳論は得失是非の問題ではなく、單に黒の趣向如何による手ではあるが、只此の十三の一着を此く低く備へてある場合は左側に此かる關係を生じるから十五の一着も其の要を見るのである、が此の十三を高く●と斜走にしてあれば、左側は急に何等の變動を見ぬかはり、下側星下方面へ右下隅の白から長驅して迫る様な意もある、といふ事を心得てあかねばならぬのである。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



白十六は大場である。  
黒十七の詰は、白に㊦と詰めらるゝを妨ぐると同時に、次で右下隅に向つて十九と打ち込まうといふ意を含んで下した手である。

白十八は右上の黒地に迫ると同時に上側に大領域を造らうといふ手である、此の十八は一路控へて㊧の點に打つのも良い。

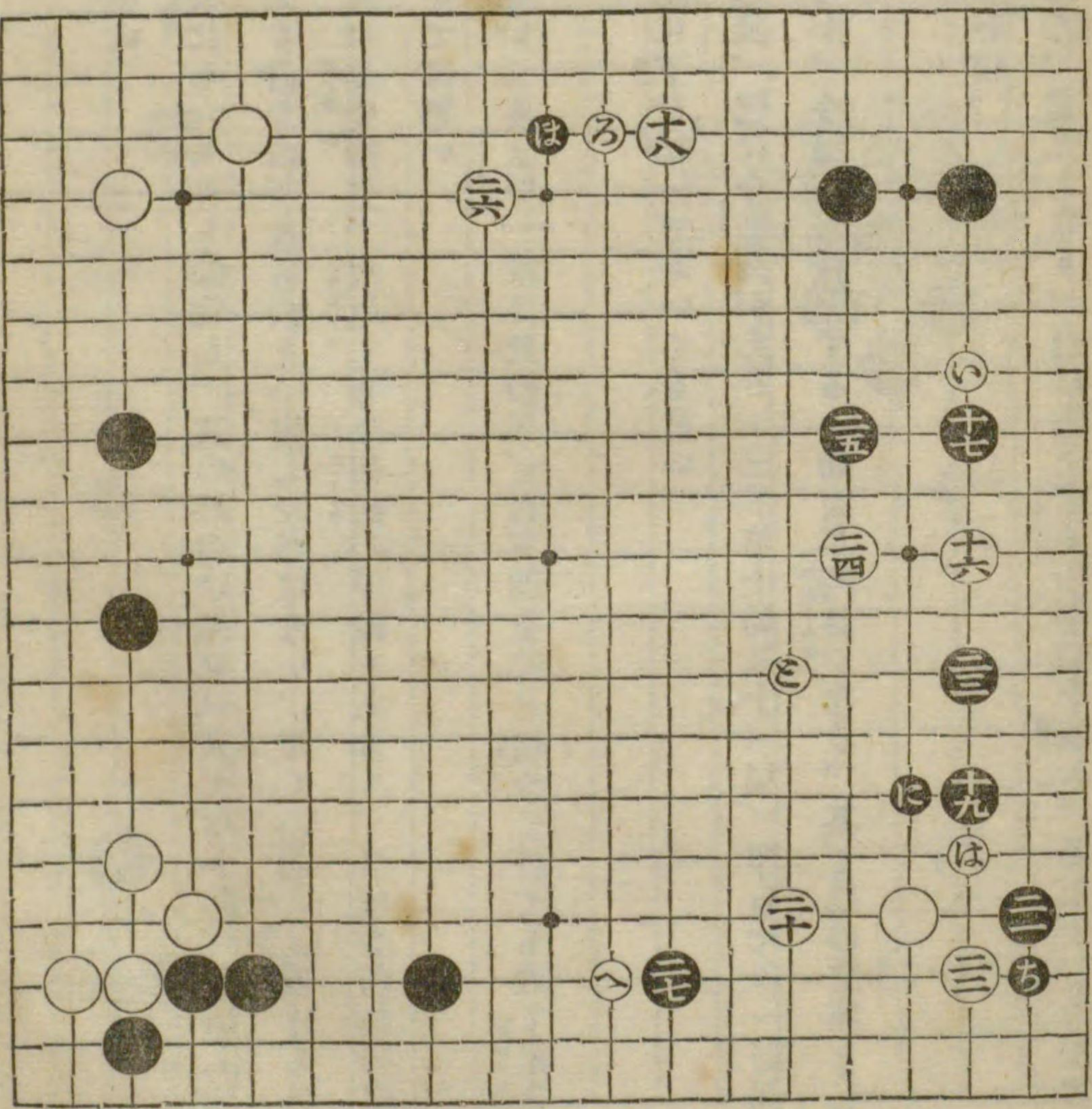
黒二十一は機先を制して實利を占める手である。

「註」黒が二十一の手を打たず茲を手抜すると白から㊨と尖頂けられ㊩と立たねばならぬのは見易き道理で、此くは折角十九と打込んだ一子を手重くして其の打込の効果を大半空に歸せしむる事になる、其故此く二十一と機先を制して白に二十二と應ぜしめ、然る後二十三と地歩を占め、此の白模様を蹂躪して徐ろに局勢の推移を觀望して居るのである。

黒二十五は白より此の點に威壓を加へらるゝを拒いだのである。

「註」二十五の點に此く黒が據つて居るか、或は白に此の點を奪はれるか、といふ事は局面全體の上に非常な關係のある事である、若し此の點を白に奪はれると、單に茲の所右上の黒地が手薄くなるばかりでなく、自然に右下三子の黒も薄弱を感じる、其の反對に白は上側の白模様に向つて黒からする打込を牽制して間接に之を防禦する事が出来るのである。  
然るに本圖の如く黒が二十五と飛んで居れば、右上方面黒地の厚壯を加へるは言ふ迄もなく、此

の二十五の一子の爲めに白十六、二十四の二子が勢力微弱であるのは直ちに右下三子の黒の安全を意味し、其と同時に上側白地に向つて黒は何時でも㊪と打込まうといふ勢力を保留する事が出来る。  
白二十六の手で若し下側㊫の邊に備へたならば黒は直ちに㊬と上側へ打込むが良い。  
黒二十七は白より㊭の邊に備へられるを拒いで、兼ねて右下の白地を削る手である。  
「註」白若二十八の手で㊮の邊に迫らば黒は二十九の手で㊯と隅に押す可きである。



~~~~~(局 先 互 法 石 布)~~~~~


第三十局

黒七は●に白四を三間夾とするも良い。

「註」黒七の手で●と白を三間夾にしたものと假定し、其の時白は如何に應ず可きか、といふに其は一に白の策戦次第で、必ず此く打たねばならぬと一定した手はない、黒から●と尖頂けられ手の豫防として②の二間飛、或は斜走掛け、夾返し等如何様の手段もあらう、又は全然此の處を手抜して他に着手する手もないでは無い。

白八は●の點若くは(イ)と星下に拓いてもよい、或は此の手で右下隅を④と締つて居ても敢て差支はなし。

黒十三は普通定石に運んで十四の點に下を粘りておいても良い。

「註」黒が此く上を十三と粘ぐのは、已に今迄例がある(三子第十局及十一局)即ち此の一局部に就ては黒は多少不利の様であるが、全局から打算すると局面が判易くなる、其で黒の立場としては差支なき手段である。

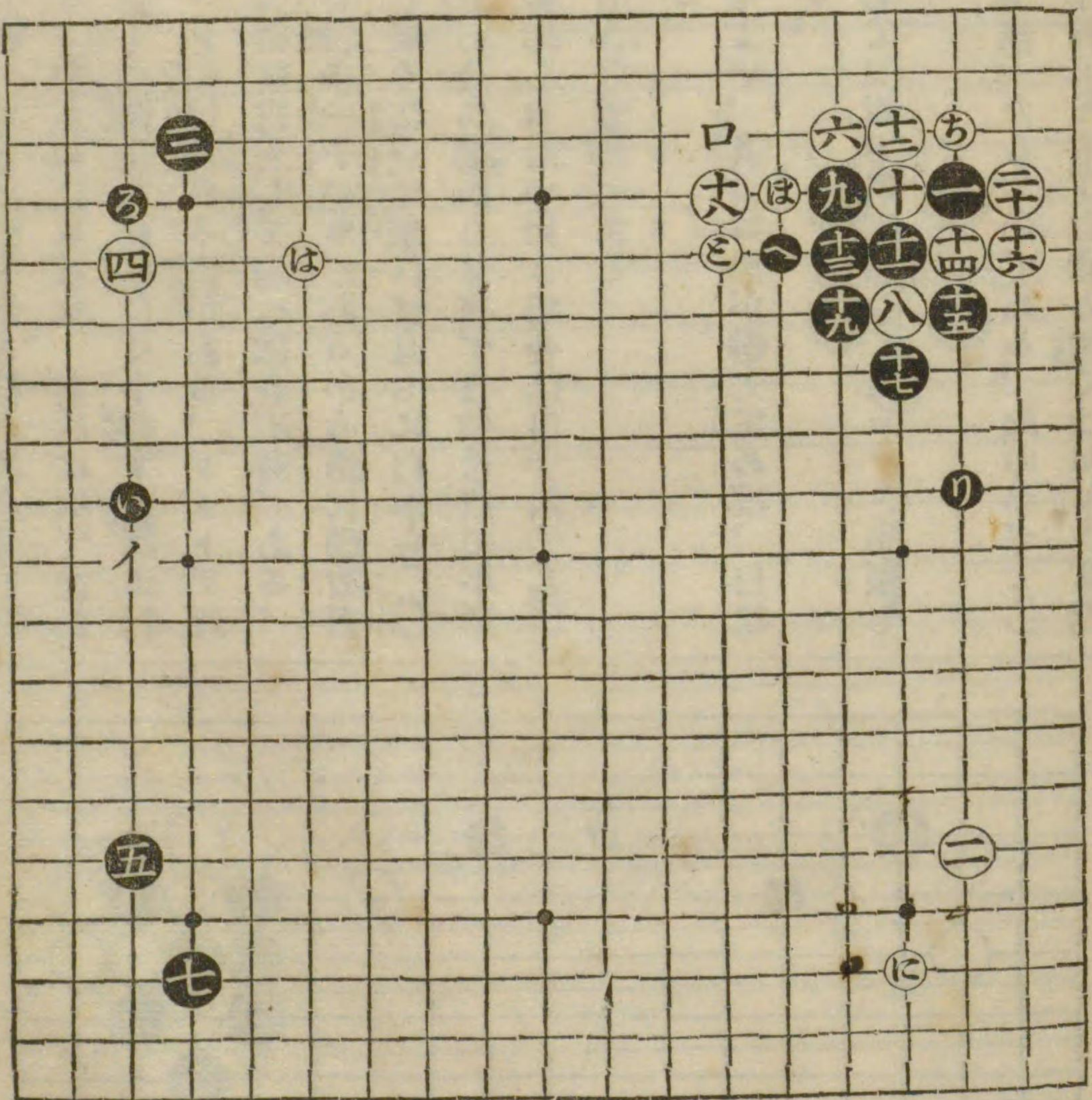
若し此の十三の手で十四の點を粘れば、

白十三、黒十九、白③、黒⑥、白⑧、黒九となり、白は④と三々の要點を抑へ、黒が十三の點を

粘いだ時、白亦十八と粘ぎ、
黒は●と三間に備へるのは大
斜定石の普通手順である。
白十八は低く(ロ)と一間に飛ぶ
のもよい。

△問 白十八を此く高く斜走
に打つのと、又低く(ロ)と一
間に飛ぶのとは何程の利害關
係を局面に生ずるや。

○答 此の十八の一着を低く
打つか高く打つかといふ事は
將來の策戦といふ事よりは現
下の場合問題即ち布石關係に
鑑みて下す手である。(次頁參
考圖參看)



~~~~~(局 先 互 法 石 布)~~~~~



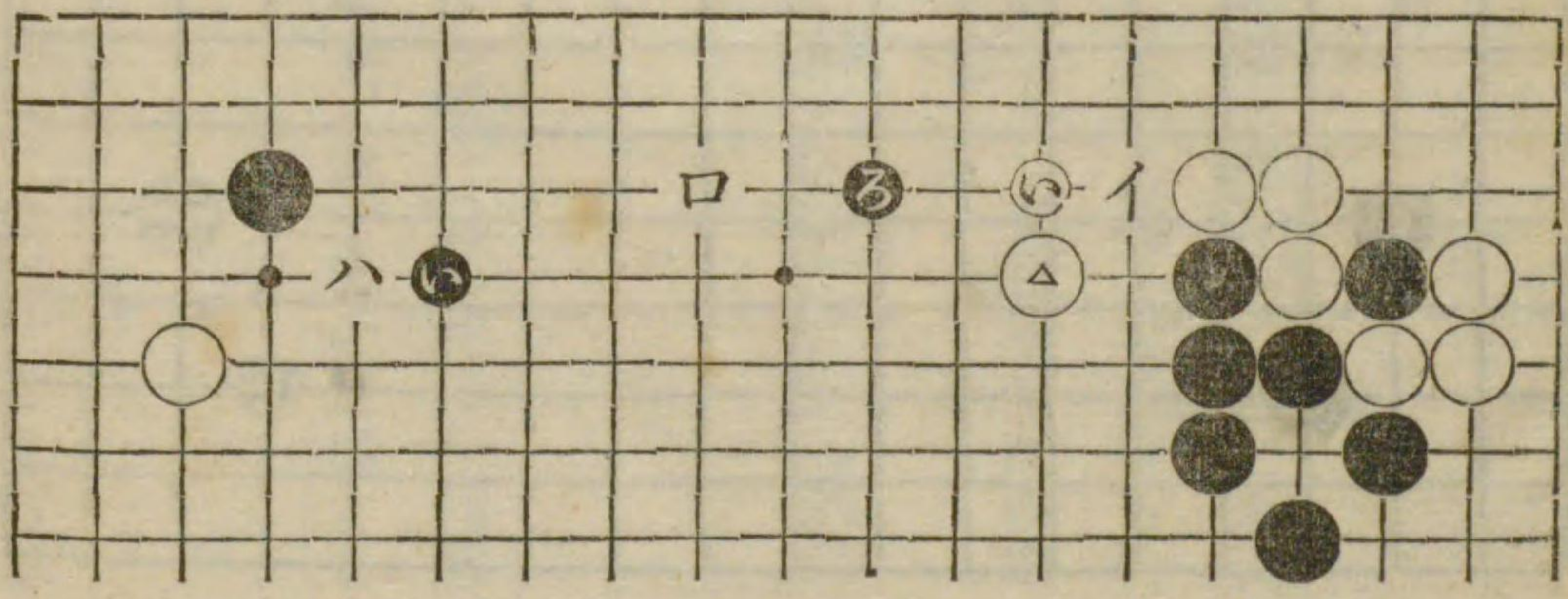
△(参考圖) 若し左上黒の布石が●の斜走でもある様な場合は、白十八(△印一子)は○と低く備へて置かねばならぬ、其故は次で黒から●と廣く詰めて來た時に白が高く△印にあれば白は手抜する譯に行かぬ若手抜すれば忽ち黒に(イ)と綽出される懼がある、サリトテ此く狹隘な區域に子數を費すといふ事は白として堪へ難き不利である。然し本局の如きは左上黒は單に小目の一子のみであるから急に●方面へ廣く拓いて來る懼はない、若し廣く拓いて來れば直ちに白から(ハ)の點に壓迫されるからである、乃で急に黒からは來ず自然に白の手順が(ロ)方面へ廣く拓き得る棋勢即ち本局の如き場合は白十八(△印)は○と低いよりは此く高くある方が好姿勢である。

黒二十一(●)と二間夾にしてもよい。

白二十二(○)と二間夾返にしてもよい、其の時黒が●と尖めば、白は●と上側に地域を劃してあくがよい。

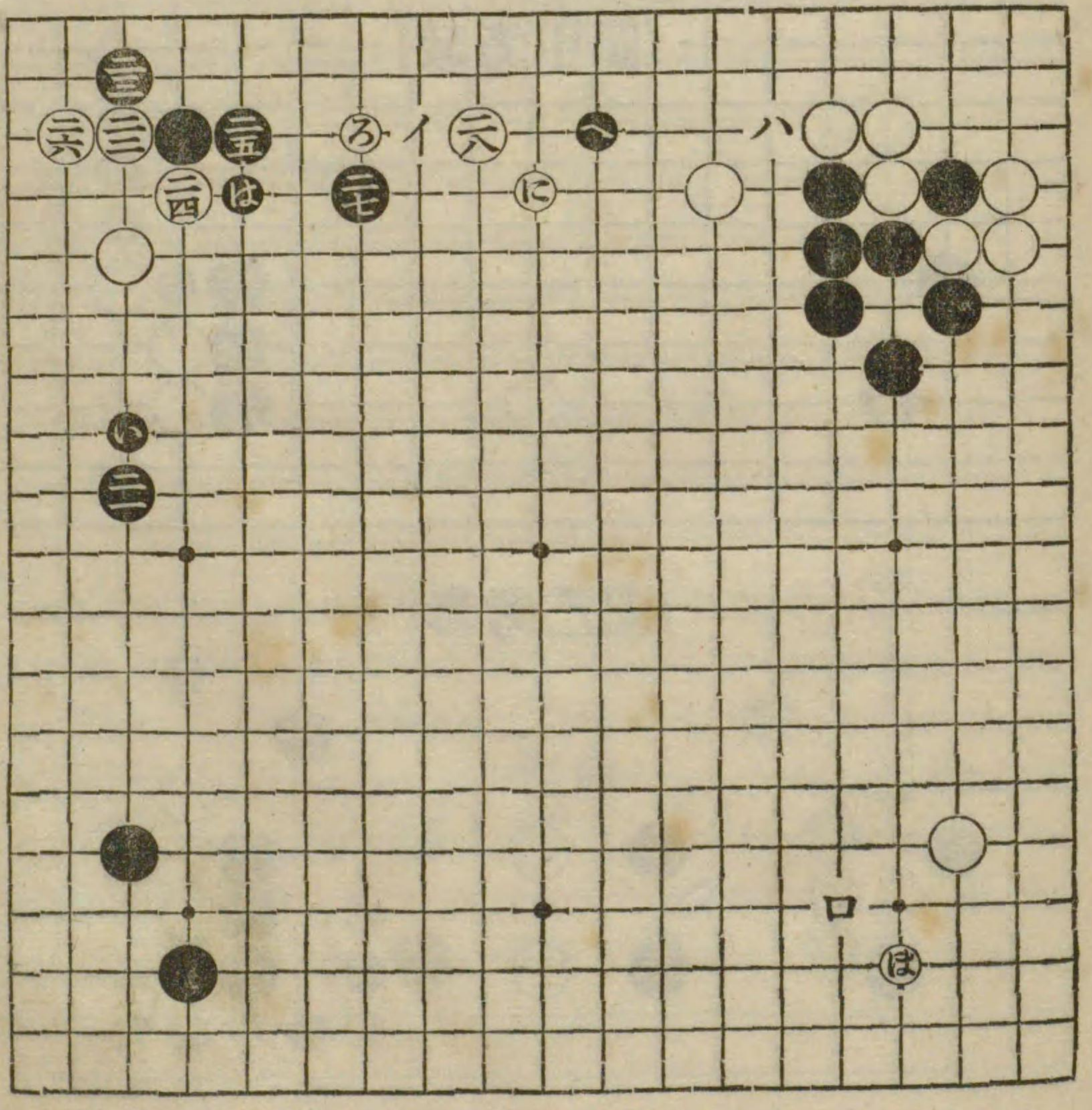
黒二十七は白二十八の一着を誘致して、右下隅に向つて(ロ)と先鞭を着けやうとの策である。

「註」此の黒二十七の秘策は趣味津々たるものである、此の手で(イ)と二間に低く拓いたならば白は手抜して右下を●と締るは見易き道理



である。

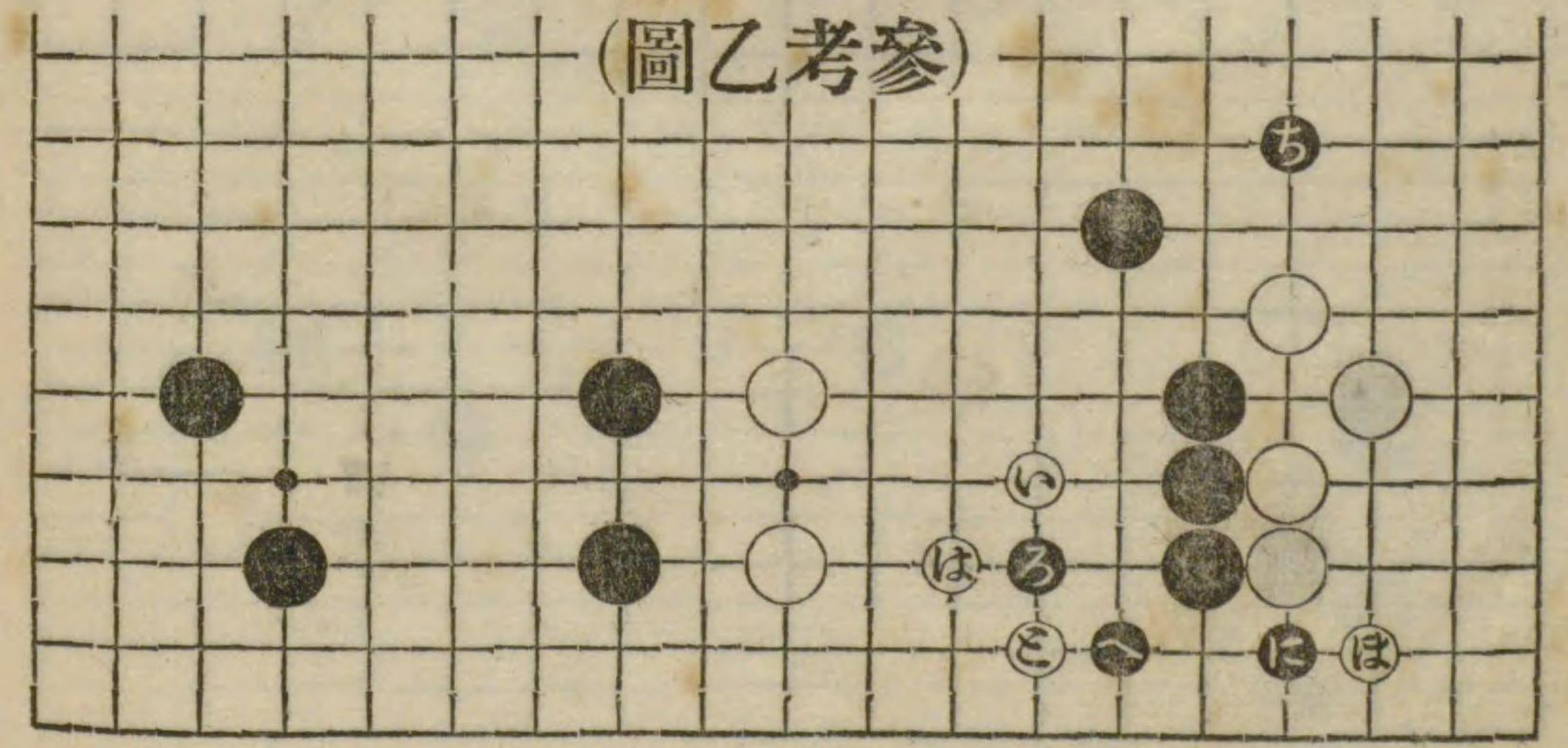
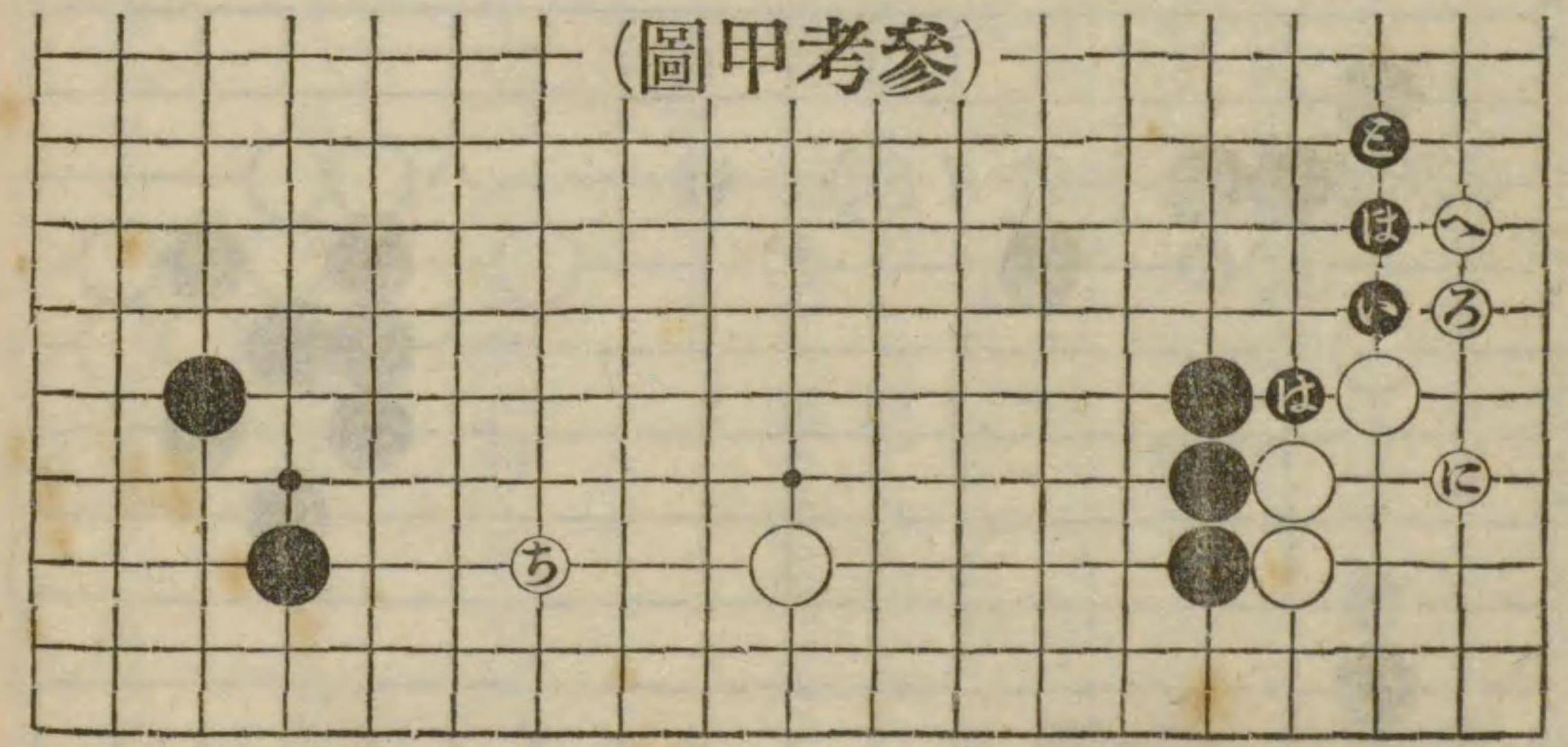
然るに此く二十七と高く斜走されては、白二十八は茲を手抜する譯には行かぬ、何故なれば若白が手抜すれば忽ち黒に●と打たれ、黒をして上側に壯大な地域を造らしめるばかりでなく白は黒(ハ)の綽出しに備へるため一着後手を引かねばならぬ、此く重大なる關係のある處であるから白が二十八と上側の好勢を收めるのは至當の事である、即ち黒は上側に好餌を與へて白二十八を誘致し、茲に先手を取つて右下隅に先鞭を着けやうといふ巧妙な策である。



~~~~~(局 先 互 法 石 布)~~~~~


黒二十九は目外の白に高壓を加へ、玆に壁を造つて左下の五、七と相待つて下側に壯大なる地域を形造らうと云ふ策である。白三十二の手を㊦と下つたならば、黒は三十三の手を以つて下側星下三十四の點を占める手順である、玆で白が三十二と上へ押したのは、黒に三十三と行ひさせて三十四と打込み、以つて下側の黒模様を削らうといふ策である。

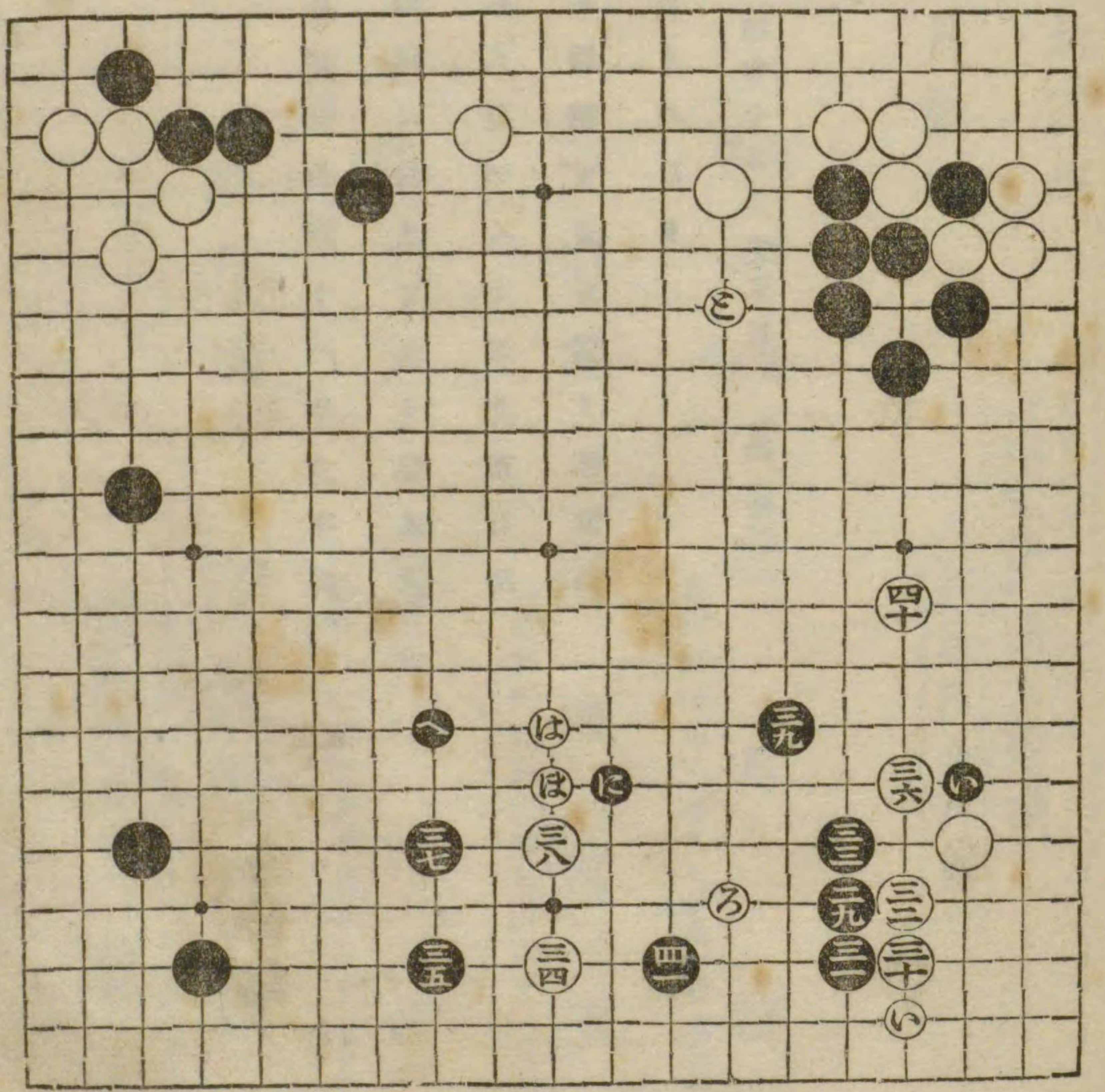
黒が三十五の手を以つて白右下目外にあるに對し㊧と頂けたならば参考甲圖の如き結果



に運ぶものと豫想する事が出来る。

若又白が四十の手で㊨(参考乙圖の㊨)と覗いて來たならば参考乙圖の如き手順に運ぶものと見て大差はない。

本圖黒四十一の後に於て、更に黒白の兩三着を想像すると、白㊩と飛び、黒㊪と覗き、白㊫と粘ぎ、黒が㊬と飛んで左方を守れば、白は上側より㊭と飛んで遙に三十四以下の四子の白を聲援する様な手順とも考られるのである。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



顧みれば、明治四十一年冬、本講  
義の編輯に従うてより、春風秋  
雨爰に八星霜、今や五先布石法  
の部を脱稿するに當り、感懐特  
に深きものあり

大正四年七月二十五日 (絶軒)

大正五年貳月拾貳日印刷  
大正五年貳月拾五日發行



編輯者兼  
發行所

廣 月 凌

東京市神田區美土代町四丁目五番地

印刷者

高 桑 基 次

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所

株式會社 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所

中央圍棋會

東京市神田區美土代町四丁目五番地  
(振替貯金口座東京一〇五八九)

布石法五先局 (奥付)  
正價金貳圓五拾錢

郵送料金八錢



〔請替領金口車東京一〇五八式〕  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八

# 中央園遊會

東京市在野園西園遊會場二十番地

東京市在野園西園遊會場二十番地

東京市神田區錦土丹波町丁日正番八



東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八

東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八

大五正平有良日發正日發許

大五正平有良日發正日發許

五圓金有圓正發錢  
東京市神田區錦土丹波町丁日正番八



202  
420

央

中

圖

會

模



